

どうすれば恨みから自由になれるのか

——キリスト教を実践するためのエッセイ集

【共著】

ジム・ウイルソン

ヘザー・ウイルソン

クリス・ヴィラコス

【訳】

ガルブレス サムエル

目次

第一章	どうすれば恨みから自由になれるのか
第二章	他人を赦すということ
第三章	人の怒り
第四章	発作的な怒り
第五章	気分を悪くすること
第六章	舌を制すること
第七章	内省

第八章 他人の恨みをどうすればいいですか？

第九章 両親との関係

第十章 満腹するほどの愛

第十一章 女性の安心

第十二章 責任感のある男性となるために

第十三章 クリスチャンになるということ

第十四章 福音

第一章 どうすれば恨みから自由になれるのか

ジム・ウイルソン

「恨み、憤り、怒り、わめき、冒瀆はすべて、一切の悪意と共に捨て去りなさい。互いに親切で憐れみ深い者となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださったように、互いに赦し合いなさい。ですから、神に愛された子どもとして、神に倣う者となり、愛の内に歩みなさい。キリストも私たちを愛して、ご自分を宥めの香りの供え物、また、いけにえとして、私たちのために神に献げてくださったのです。」

(エペソ4章3―5章2節)

私たちはこの御言葉で、「一切の恨み(＝苦い思い)を捨て去りなさい」と教えられています。その理由や方法を考える前に、まずは「根拠」を見ていただきたいと思います。というのも、私たちが恨みを捨て去る理由も方法も、「キリストの十字架」を抜きにしては考えることができないからです。イエスは私たちのために十字架についてくださいました。私たちは何をするにせよ、神に倣う者とならなければなりません。

旧約聖書には、「愉快さん」という名前の女性がおりました。ルツ記に登場する「ナオミさん」ですね。そんな彼女は夫と、二人の息子と共に、イスラエルを離れて別の国に移り住んで

いました。しかしその地でまずは夫が亡くなり、それから十年も経たないうちに、夫に続いて息子たちも亡くなってしまいました。

そこでナオミは未亡人となった義理の娘に対して、このような言葉を言いました。「あなたがたはその子が大きくなるまで待つというのですか。それまで、あなたがたは夫を持たないままているのですか。それはいけません、娘たち。あなたがたよりも私のほうがはるかにつらいのです。主の手が私に下ったのですから。」（ルツ記一章―3節）。自分のおかれている状況と、義理の娘の状況を比べ、義理の娘よりも自分の方が苦い思いを抱えて当然だと判断したのです。

ルツ記一章20―2―節ではこのように話しています。「ナオミは女たちに言った。『ナオミ（＝愉快）と呼ばずに、マラ（＝苦い）と呼んでください。全能者が私をひどく苦しめたのです。私は満ち足りて出かけて行ったのに、主は私を身一つで帰されたのです。どうして私をナオミと呼ぶのですか。主は私を痛めつけ、全能者は私に災いを下されたのです。』」

ナオミの恨みは神に対する恨みでした。「自分の夫を取ったのも、また息子を連れ去ったのも神なんだ。」だから神に対して苦い思いを持っていたのです。この三節だけで五回も、自分の恨みを神のせいにしていきます。

今日もこのような人は決して少なくはありません。恨みをかかえているだけでなく、そんな苦い思いをかみしめて味わっている。そんな苦い思いがなぜか好きで、恨みを日毎の糧としてしまう。もし恨みをなくしてしまったら人生の目的を見失ってしまう人もいるかもしれませぬ。それくらいに苦い思いが捨てようにも捨てられないような方がいるのです。

こんな人はもちろん世の中にもいますが、でも世の中だけでなく、教会の中にもいます。恨みを抱えている人はわかりやすいでも。苦い思いというのは、顔にも、目元にも、またシワの形にまでも現れます。若者でもそうなんです。笑っているときの口。話しているときの声。「自分には恨みなんてないんだ！」と抗議する言葉にさえも。でも心の中心に恨みがあれば、その根は体の隅々にまで張ってしまうのです。

聖書の中で言えば、ナオミの他にも恨みを抱えていた人がいます。思いのほか多いかもしれませんね。もう一人代表例をあげるとすれば、ヨナは恨みを持っていた男でした。主はヨナに言われました。「あなたは怒るが、それは正しいことか。」

ヨナは答えて言いました。「もちろんです。怒りのあまり死にそうです。」（ヨナ4章9節）。

ヨナは怒って当然だと思っていました。何なら怒っていたい。「神様、あなたが悪いんだ。人を赦すのは間違っている。人を赦さないでほしい。」

他人に対して思いを募らせてがんじがらめになってしまうのは、それ一つ人間の本性かもしれません。でも今日の御言葉では、すべての恨みを捨て去り、互いに親切で憐れみ深い者となるように教えられています。

ここで質問です。親切で憐れみ深い者でありつつ、裏で苦い思いをかみしめることはできるのでしょうか。いえ、親切も憐れみも恨みもすべて、体の内側にある「心」の持ち様です。言い換えれば、憐れみ深い者は憐れみ深い心を持っているのです。したがって、恨みも心の内側にあるわけですから、同じ心に憐れみと恨みを隣り合わせて植え付けることはできません。

そこでパウロは「恨みを捨て去り、親切で憐れみ深い者となるように」と教えています。したがって、憐れみ深い者となるためには、恨みを捨てなければなりません。でも恨みを取り除く前に、まずは「恨みとは何か」、それから「なぜ恨みが心の中で根を張ってしまうのか」ということを考えてみるのも良いかもしれません。

他人が恨みをもっていて、いかにも苦いときには、すぐにわかります。でも自分の心に恨みがあるときは、灯台下暗しなのか、なかなか自覚を持ちづらいときがあります。だから聖書に基づいて恨みの問題を考え、聖書の基準に従って自分の心を吟味するのが大切なのです。

あるクリスチャンが罪を犯したとしましょう。例えば、嘘をついてしまったと。そんな彼が嘘をついたとき、彼が感じるのは「罪悪感」でしょうか。それとも「恨み」でしょうか。もちろん「罪悪感」です。罪を犯せば、私たちは罪悪感をおぼえます。ここまでは分かりやすいですね。でも例えば他人がこのクリスチャンの男性について、嘘の内容を町中に広めたとしましょう。今度はどうでしょうか。「罪悪感」でしょうか。「恨み」でしょうか。

つまり「罪悪感」は私たち自身の罪について感じる感情、「恨み」は他人が犯した罪に対して感じる感情なのです。苦い思いは必ず他人に向く感情なのです。もし自分が罪を犯していたとしたら、私たちは罪悪感をおぼえることでしょうか。その罪を神に告白し、赦していただくことができます。罪を告白しないことがあったとしても、それは悪いと知っていなながらも告白しないことを選んだ私たちに責任があります。でも他人が犯した罪についてはどうすれば良いのでしょうか。

苦い思いは必ず他人の言動に基づいています。少なくとも、私たちの視点から見た他人の言動に基づいていますね。でも「私たちの視点」がからんでいる以上、本当かどうかは分かりません。例えば、ある人が話した言葉を第三者から聞いて、その第三者から聞いた報告に基づいて苦い思いを抱いてしまったとしましょう。それでいつまで経っても、その人は謝ってくれない。でも第三者の報告が間違っていたとすれば、どうでしょうか。その人は謝らなければならぬというようなことを一つもしていないのに、それでも私たちは、その人が謝ってくれるまではいつまでも苦い思いを持ち続けるのでしょうか。

でも恨みを持っている人は、恨みを持って当然だと思っていることがほとんど。自分の視点が間違っているかもしれないということは、あまり視野にはありません。それだけ相手の言動が罪だったということを確認しているのです。それはそうかもしれないし、そうではないかもしれませんが。いずれにせよ、恨みは捨て去らなければなりません。逆に言えば、恨みを捨てているのであれば、相手の言動が間違っていたという思いは変えなくても構いません。

でも想像の話ではなく、実際に他人の罪によって害を被った人はどうなのか。相手から不当に扱われた人はどうすれば良いのでしょうか。直接受けた被害に関して、それでも恨みを捨て去らなければならないのでしょうか。

苦い思いというものは、自分と関係のある罪から生まれる気持ちですが、「罪の大きさ」というよりは、「罪の近さ」が問題です。例えば、とんでもないニュースを読んだとしましょう。もしその犯罪が起こったのがイランか、イラクか、コロンビアか、そのような遠く離れたところで起きた事件だったとすれば、私たちはどんな気持ちになるのでしょうか。その事件の記

事を読んでも、罪悪感を覚えることはないでしょう。またどんなに呆れた事件だとしても、遠く離れていることであれば、恨みは湧いてこないはずです。だから「恨み」という気持ちは必然的に自分と関係のある人、近しい人に対して生まれる気持ちなのです。罪の大きさ以上に、罪の身近さが問題なのです。

それでは私たちに恨みがあるとすれば、誰に対して生まれやすい感情でしょうか。有力候補はこんなところでしょう。父、母、兄弟、姉妹、夫、妻、子ども、彼氏、彼女、ルームメイト、上司、部下、同僚、同業者、その他の親戚、等々。また神に対して恨みを抱いている人も少なくありません。

私たちに直接からまないような悪に対しては、あまり「恨み」という気持ちは生まれません。いえ、恨みは私たちの近くにいる人で、私たちに対して何か悪さをした人に対して生まれる気持ちです。些細なことで苦い思いが生まれてしまうこともあるでしょう。というのも「罪の大きさ」ではなく、「罪の近さ」が問題なのです。あの人はいつも靴下を放ったらかし。靴下を置き忘れたのが一回だけなら恨みは起らないかもしれませんが、でもさすがに五千回目になると…。

「自分は恨みを持っていて当然だ」と思うかもしれませんが、でも聖書によれば、苦い思いを持つ権限は誰にもありません。この御言葉で教えられているとおり、私たちは恨みを捨て去らなければならぬのです。

「神の恵みから漏れる者がないように、また、苦い根が生え出て悩んだり、それによって多くの人が汚されたりすることのないように、気をつけなさい。」（ヘブル―2章―5節）。

ここで恨みは「苦い根」と描写されています。根は地下にあるものですから、掘り出すまでは目で見ることができません。でも根が確かに生えているということは、アスファルトの亀裂などを見れば分かるものです。

だから根が見えないからと言って、根がないとは言い切れません。また今は見えていなくても、やがて見えるようになるものもあるかもしれません。でも根があるとすれば、その根は心の栄養をたくさん吸収して、やがては芽を出すようになっていきます。

実と根は一致します。実をならせたのは、根ですからね。したがって、リンゴの根がリンゴを実らせるようにして、苦い根は苦い実を生み出すものです。

だから言われているのです。苦い根は小さいうちに取り除かなければなりません。なぜなら、育ってしまうと、その根によって多くの人がよごれて汚くなるからです。苦い思いが教会中に蔓延したところを見たことはありませんか。まるで山火事のように広がっていきます。でも教会に限らず、職場や大学の寮といった場所でも簡単に広がってしまうものです。どうして広まるのでしょうか。それは誰かが他人に苦い実を食べさせたからです。まずはその人自身に苦い根がありました。その根を養ったあげくに、その根が実らせる実はもちろん苦い実です。その実を摘み取って、他人に食べさせたのです。それで多くの人が苦くなってしまったのです。へブル書の著者は「気をつけなさい」と教えているのです。「苦い根」を育てている人は、「神の恵み」から漏れてしまっている人。神の恵みから漏れていけば、苦い根が育ちやすくなりますし、その波紋が周りにも広がっていくのです。

それで他人に広がらないようにと思つて、何年も苦い思いを心の中で持ち続けていく人はどうなるでしょうか。その人の体はどうなりますか。例えば家族の誰かに対して恨みがあつたとしましょう。それで「多くの人を汚さないように」と気をつけようと、その恨みについては誰にも話さなかつたとします。その思いを心の中で何十年も持つっていると、やがて体が痛くなつてきます。それでお医者のところに行くと、お医者さんからは、「確かに病氣ですね。でも私の専門外です。そちらの病院に紹介状を出します。」と言われます。

それで紹介状を手にして向かつた先の精神科医からは、このように言われます。「確かに病氣ですね。その理由もわかりません。あなたは父親に対して、二十年も恨みを持つてきましたね。それをずっと抑えてきたので、体の中がすっかり悪くなつてしまつています。この毒を一滴もこぼさないようにと頑張つてきましたね。でもそれが理由で、今度はあなたの体の中で中毒が起きてしまつています。だから処方を行いますね。今夜帰つたら、父親にすべて話してください。あなただけが苦しむ理由はない。父親にも思いを分けてあげなさい。」

つまり毒をもって毒を制しているのです。苦い思いの処理の仕方に関して、この世は二手に分かれます。ある人は「ぐつとこらえなさい」と言い、また他の人は「すべて口に出して苦さを分散しなさい」と言います。でも神の解決策は違います。神は「掘り起こして捨て去りなさい」と言うのです。でもこれをするためには、神の恵みがどうしても必要。誰も主イエス・キリストを知るまでは、恨みを掘り起こして捨て去ることはできません。なぜなら、イエスこそが恵みの源だからです。

だからクリスチャンはこの世のやり方にならって苦い思いを処理してはいけません。この世は恨みの正しい処理の仕方を知りません。こらえるか、人に分けるか。どちらも良い処理の仕方ではありませんし、根本的な解決策とはなりません。いえ、私たちはこらえてもいけませんし、人に分けてもいけません。その代わりに、イエスの御名によって、父なる神にお委ねしましょう。

「しかし、あなたがたが心の内に、苦々しい妬みや利己心を抱いているなら、誇ったり、真理に逆らって嘘をついたりしてはなりません。そのような知恵は、上から降って来たものではなく、地上のもの、自然のもの、悪魔から出たものです。」

(ヤコブ3章14〜15節)

私が海軍兵学校に通っていたときのこと、兵学校によく見ていた妬みやいがみ合いは、卒業すればなくなると思っていました。海軍の中で地位があがればあがるほどに、人格が成長した人が増えてきて、そうすれば妬みやいがみ合いがなくなると思っていました。でも歳を重ねるごとに分かってきましたが、減ることはなく、増える一方だったのです。恨みは堆積するもの。その都度解決していかねければ、歳を重ねたぶんだけ、苦い思いは増えても、減ることはないのです。どんどん苦さが増し、どんどん暗くなってしまう。

そして苦々しい妬みがあるところには、悪い行いも増えます。恨みは天から降ったものではありません。いえ、恨みは奈落の底から頭を出してくるものであり、悪魔にならうことです。

すべての悪はこのような心から生まれるのです。だからこそ、ここが重要なのです。恨みはどうしても処理しなければならぬのですが、どうすれば恨みから自由になれるのでしょうか。

恨みから自由になるためには、まずは恨みを持つていることを自覚しなければなりません。どうすれば自分の心が苦くなっているのかを判断できるのでしようか。そこで一つ良い判断基準だと思うのが「記憶」です。恨みには忘却はなく、細かいところまでも覚えて離しません。きつとあなたはこれまで、人生にわたって何千という会話をしてきたことでしょう。その会話のほとんどは覚えていないはず。それでも五年前にあの人と話したときの会話を覚えているのはなぜでしょうか。その人が言った言葉も、イントネーションも、トーンも。そこで起こったことは事細かに覚えているのはなぜでしょうか。おそらく苦い思いが心に残っているからです。

ここで誰かが反論するかもしれません。「だって、記憶力さえよければ、今まで友達と交わした楽しい会話も覚えているでしょうし、そんな会話には恨みはないはず。だから会話を事細かく覚えているといだけで、苦い思いが心に残っているとは言い切れないのではないか。」もちろんその可能性もありますが、薄いでしょう。なぜなら、記憶を裏付けているのは復習、復習、復習。人というものは、今までの楽しい思い出を折に触れて思い出すことはあっても、その頻度はそう多くはありません。でも悪い思い出に関しては、何度も何度も思い出してしまふのです。私は離婚を考えている夫婦のカウンセリングをしたことが何度もあります。中には、仲睦まじく結婚していたときから知っていた夫婦もいるのですが、離婚に際して彼らの話を聞いていると、二人は「今まで仲が良かったときのことは一つも思い出せない」と言いま

す。なぜなら、彼らが覚えているのは、何度も何度も脳内再生した場面。苦い心に駆り立てられて、何度も思い出していたのは、恨みのもととなった出来事だったのです。

そんな二人は仲が良かったときを覚えていないかもしれませんが、きっとあったはずですよ。それでも「自分が正しい」という思いと、「相手が間違っている」という思いとに焦点を合わせ続けた結果、二人が仲良く結婚していたときは思い出せなくなってしまうたのです。もし何年も昔のことで、例えば子どもの頃、あるいは若者の頃におきたことについて、何年経ってからも具体的に覚えていられるとして、その記憶が誰かに関して非難がましいものだとすれば、ほとんど間違いない「恨み」の心があると思ってしまうでしょう。ともすれば、その恨みはどうすべきか。捨て去らなければなりません。

何年前のこと、テキサス州ダラス市での良い思い出があります。土曜日の夜に、古くからの友人のお宅でお話しをすることが決まっていました。ダラスに行くことが決まっていたから、そのあたりに住んでいる知人に声をかけてみました。それで皆集まって、友人のお宅で一緒に食事をしました。

友人からは「『恨みの捨て方』について話してください」という依頼があったので、夕食のときにはそのテーマでお話しました。その後、ある夫婦が私のところに来てくれました。彼らとは八年ほど前に、ワシントン州ポールマン市で出会っていました。夫人はこう話してくれました。「今年で結婚八年目に入りますが、結婚して一年目がどうしても苦しかった。母親に対しての苦さが捨てられなくて、毎日のようにお母さんの恨みを夫に話してしまった。それが毎日だったから、結婚して一年目がどうしても苦しかった。」

そして七年前に、私と話している中で、私から「苦い思いを捨てなさい」と教えられたことがきっかけで、お母さんに対する恨みをすべて捨て捨てる決心をしたと話してくれました。ある日、その夫人はもう一人の女性に会いました。彼女も母親に対してとても苦い思いを持っていました。そこで夫人は思いました。「私の経験を話してあげれば彼女の気持ちを軽くできるかもしれない。」それで頑張つて昔のことを思い出そうとしたそうです。「でもいざ自分のお母さんのことを話してあげようと思つて、過去のことを思い出そうとしたら、見事に思い出せない。今までは具体的なことまでもすぐに思い出せたのに、全然覚えていない。彼女には『昔は覚えていたけど、今は全部忘れてしまったんだ』としか言えなかった。」主は本当に彼女の苦い思いをすべて取り除いてくださったのです。

またあるときのこと、私は四週間かけて結婚について教えたときがありました。どんな人が来るのかは全く想像もできませんでしたが、それでも結婚セミナーについて、新聞に公告を載せてみました。ある女性は、病院の先生の紹介で私の結婚セミナーに来てくれました。正直言つて、彼女ほどに恨みが顔に滲み出ていた人はいまだかつて見たことがありません。そんな彼女は四十年分の苦い思いを蓄えていたのです。しかしその夜、彼女は決心して、今までの恨みをすべて除き去りました。それで日が明けて、次の日に私が運営していた書店にまで来てくれましたが、私ははじめ誰だろうと思つて、二度見三度見しました。表情も何もかもが変わつていて、別人となつていたのです。昨夜会ったばかりのはずが！でも彼女は心からキレイになつていたのです。

何が問題なのでしょう。どうして恨みを捨てないのでしょか。もし嘘をつけば、嘘をついたという罪を主に告白して、主の赦しをいただくことができます。言い換えれば、自分のしたことを罪と自覚して、それで告白すれば、その罪は赦されて肩が軽くなるのです。恨みや苦い思いに關しても、同じことをしなければなりません。でもここが難しい。なぜなら、恨みを持っているのは、加害者に目を向けているから。「あの人がやったことは……」と思つて苦い思いをかみしめている。それが恨みの性質なのです。しかし恨みを取り除いてもらうためには、その苦い思いを離さない心を自分の過ちとして告白しなければなりません。

「苦いんじゃない。繊細だから傷つきやすいんだ。」と言うかもしれません。でも傷ついているときの症状と恨んでいるときの症状はほとんど一致します。一瞬の恨みを私たちは「傷ついた」と言います。最初は傷ついたのであるかもしれませんが、その傷はあとから恨みとなり、恨みをそのまま放つておけば、苦い思いが体中に行きわたります。

恨みを持ち続けると苦い思いにつながります。心に抱えて離さない分だけ、中毒をおこして体を悪くしてしまいます。

この鎖はさらに続いていきます。苦い思いを放つておけば憎しみになりますが、憎しみが殺人とつながっていることは聖書で教えられているとおりです。だから「傷ついた」という思いが、殺人にまでつながるといふこともあります。大げさだと思ふかもしれませんが、でもこの連鎖は確かに聖書から読み取れます。

ここで何よりも皆さんに分かつていただきたいのは、恨みがどれほどの罪なのかということ。恨みを持つている人は、まずは自分に恨みがあるということに自覚した上で、それから

恨みを持ち続けることがどれほど大きな罪なのかを覚えなければなりません。どうしてこれが難しいのかと言えば、自分が恨みを持っているのは他人の罪のせいだと思っただけからです。そこに付け込んで、サタンはこうささやきます。「そうだそうだ。あいつが嘘を付かなくなつて、『こういうこと』、『ああいうこと』をしなくなれば、そして自分の非を認めて謝つてくれたら、あなたの気持ちは楽になるよ、きつと。」

でも例えば「あの人」が辞めなかったとしましょう。また、これから先、辞めることがないとしましょう。相手が罪を離れないからと言つて、あなたも一生涯苦い思いをし続けるのですか。そんなことはしなくてもいいのに。しかし、そこで言うかもしれない。「相手が謝つたら赦すけど、それまでは赦さない。それまではあの人に対して恨みを持ち続ける権利がある。あの人^が謝つてくれたら、そうしたら赦す。それで元通りに戻るはずだ。」でも恨みの壁を作つて支えているのはあなたなのです。それでいざ「あの人」が来て、あなたに謝つたとしても、赦せると思いますか。いいえ、赦せないはずです。なぜなら、恨みには赦しはないからです。相手が謝罪したときに彼を赦すためには、前もつて、彼を赦す決心をしていなければなりません。もし相手が謝罪する前から「赦す決心」をしていなければならぬとすれば、もはや相手のことは関係ありません。つまり、恨みを断ち切ることは、相手を抜きにして、自分一人でできる決断なのです。相手を待つ必要はありません。

先ほど私は、恨みは相手のした言動に基づいて心に沸き起こる感情だと思わせる言葉を言いましたが、それはあくまでも外面的なことです。表面的に言えば、そういうふうに見えるとい

うだけのこと。中を開けてみれば、実際、恨みというのは孤立した罪なのです。苦い思いを持っている人は、大元の加害者とは関係なしに、苦い思いを持ち続けているのです。

「いや、私に対して罪を犯したのはあの人なんだ。だからあの人か謝ってくれば解決する話なんだ。」と言うかもしれないませんが、そうではありません。加害者が謝ったのに、それでも恨みを捨てられない知人もいます。あるいは加害者がすでに亡くなっている場合はどうするか。そうしたら謝罪はもう来ません。私の知人にもそういう人がいるのですが、何年も前から持ち続けている恨みを捨て切れずにいる彼らが誰に対して苦い思いを持っているのかと言えは、数年前に亡くなった両親。両親はもう亡くなりましたが、それでも恨みはなくなりません。だから言います。恨みというのは、恨みを持っている本人の罪であって、他人とは関係ありません。

あるとき、クリスマススの頃でしたが、私はワラワラ市にあるワシントン州刑務所で、受刑者たちと一日を過ごしていました。州刑務所にいたのは六時間ほどだと思います。その日の午後最高警備刑務所で「伝道」について話していました。そこである男性が聞いてくれました。「どうすれば凶悪犯に伝道できますか。」なんとも伝道熱心な受刑者だと驚きましたが、時間をかけて彼と伝道についてお話ししました。その後、刑務所の他の監房をまわってから、夕方にもう一度、最高警備の方に戻ることになりました。帰る前に「恨み」について話しておくと思いだろうと判断しました。きっと刑務所には恨みを持っている人は一人二人はいるかと思っています。

そのとき、さきほど伝道について聞いてくれた男性からもう一つ質問を受けました。彼はこう聞きました。「三歳の息子を無慈悲に叩き殺した人に対しての恨みはどうすればいいですか。」

私はいつもどおりに恨みから自由になる方法を話してあげました。それから彼には言いました。「その人に対しての恨みを捨てることができれば、いろいろな方法で用いられると思うよ。例えばその人が二度と同じ罪を繰り返さないように教えてあげられるかもしれない。」

彼は答えました。「いいえ。彼はもうどうにもなりません。」

私は言いました。「そうは言えないよ。」

「いやいや…」

「なんで助からないって言うの？」

「彼はもういないんだ。」

この受刑者は殺人罪で収容されてきました。自分の息子の殺人者を殺したのです。だから刑務所にいたのです。でも相手を殺しても、それでも恨みが晴れていませんでした。恨みをあらわにしてもなお、苦い思いはなくなりませんでしたし、相手を殺してもダメでした。心と恨みとは、死によってさえも、分かつことはできません。

加害者が謝ってくれることもあります。それでも私たちの心からは恨みを取り除いてくれるのは「相手の謝罪」ではありません。いえ、恨みと苦い思いの解決策は一つしかありません。それはすなわち、主イエス・キリストの死と復活に基づいて、自分の恨みを罪として神の前に告白することです。これ以外に解決策はどこにもありません。

でも「あの人」は何年も前に亡くなったと答えるかもしれません。「自分は、収容されていた男性みたいに、加害者を自分の手で殺していない。」それでも変わりません。加害者がすでに亡くなっているという点は一緒。それでもなお苦い思いを持ち続けてしまう心も一緒。

また加害者が主を信じていたとすれば、今は主とともにいて、全く赦され、全く清くされているのです。あなたは子羊の命の書にその名が記されていて、今なお天国で主と共に喜んでいる兄弟に対して苦い思いを持っているのです。

もし信者でなかったとすれば、その人は今、第二テサロニケで教えられているとおりに、神の裁きを受けていることとなります。「実際、あなたがたを苦しめている者には苦しみをもって報い、苦しめられているあなたがたには、私たちが共に安らぎをもって報いてくださるの
が、神には正しいことなのです。それは、主イエスが力ある天使たちと共に天から現れるときに実現します。主イエスは、燃え盛る火の中を来られ、神を知らない者や、私たちの主イエスの福音に聞き従わない者に、罰をお与えになります。」（第二テサロニケ一章6〜8節）。

「愛する人たち、自分で復讐せず、神の怒りに任せなさい。『復讐は私のすること、私が報復する』と主は言われる』と書いてあります。」（ローマー二章19節）。神は義で正しいお方です。神に報復してもらいましょう。

でもたとえ加害者が今生きていたとしても、それでもあなたの心にある恨みは、相手にはどうすることもできません。相手が謝罪しても、またあなたが恨みをぶつけて相手を殺したとしても、それでもあなたの心にある恨みは処理されないので。だから結果として、あなたは今生きていて、苦い思いをしていて、自分と自分の周りにいる人に苦い思いを広げている。何が

きっかけとなって苦くなってしまうのかとはお構いなしに、まずは心にある恨みを自分の罪として弁えなければなりません。これを罪として神の前で告白するなら、神は一瞬にしてあなたを赦し、あなたの心を喜びで満たしてください。苦い思いを持ち続けてもいけませんし、周りの人に分けてもいけません。いえ、すべきことは一つ。すなわち自分の中にある罪として告白することです。心に植わってしまった雑草、苦い根をすべて除き去るまで、諦めないで主に告白し続けましょう。

私はあるとき、カリフォルニア州モントレイ市にある海軍大学院で教えていました。そこには聖書の教師として評判の高い先生がいました。彼は海軍で兵科将校を務めていましたが、何年前に潜水艦の潜水艦艦長に任じられなかったことで、心の中で恨みを持っていました。私はその日、罪の告白と恨みをテーマとして講演しましたが、彼は心を打たれたようでした。それで講義を終えた後、私に会いに来てくれて、苦い思いと一緒に悔い改めました。次の朝、彼の妻が私に言いました。「まるで旦那が新しい人になったみたい。」彼は長らく海軍に対して恨みを持っていました。しかしそれは海軍の罪ではなく、彼の罪だったので。

エミー・カーマイケルは『カルバリーの愛を知っていますか』という本の中で、このようなことを話していました。甘い水で満たされた杯は、どんなに揺さぶっても、苦い水をこぼすことはできないのです。それはそうですね。杯の中にあるのが甘い水だとすれば、杯を揺さぶってこぼれてくるのは、当然、甘い水のはずです。さらに揺さぶっても、甘い水。いつまで揺さぶり続けても、甘い水。甘い水しか出てきませんね。どんなに揺さぶっても、揺さぶることそ

のものには、甘い水を苦くさせる力はありません。杯の内容が変わるとすれば、それは他人の仕業です。

揺さぶられたときに出てくるものは、すでに心の中にあつたものです。もし心が蜜と光で満たされていて、それで揺さぶられることがあるとしたら、出てくるものは甘い言葉と光です。蜂蜜の入れ物を割ってしまったら、割れ目からこぼれてくるのは蜂蜜です。しかしもし酢がこぼれてきたら、それはどういう意味になるでしょうか。入れ物に入っていたのは蜂蜜ではなく、酢だったということが分かります。言い換えれば、苦い思いや恨みは、他人の言動によるものではないのです。いえ、私たちの心にあるものが表に滲み出ているだけなのです。

何年前か前、私は寢室の机に向かって仕事をしていました。妻のベッシーはベッドの方で本を読んでいた。何をしていたのかは覚えていませんが、進みが悪かったのでしょうか。ベッシーは私を向いて、何か話してくれましたが、私はそんなところではありませんでした。ベッシーの方を見て、口からでてきたのはひどい言葉。クリスチャンとは思えないような話ぶりでした。ベッシーはびっくりした顔をして、何も言わずに立ち上がり、別の部屋に行きました。私は心の中で思いました。「こんなに忙しいのに、それも分らずに話しかけたベッシーが悪い。ただでさえ立て込んでいるのに。なんでそれが分からないんだ。」そんなことを自分に言い聞かせながら、分針の動くこと十分間。私はベッシーに対して苦い思いを持っていました。しかし彼女がしたのは、唯一、私を揺さぶること。それで杯からこぼれてきたのは、私の心の内にあるものでした。

もし私が蜜と光で満たされていたとすれば、揺さぶられても何も変わらなかったはずです。私は彼女の言動を考えました。自分が悪いってことくらい、私が一番知っているはず。だって、恨みというのは本人の罪だということを知っていて、それを教えているくらい私ですからね。しかしそのときになるとすっかり忘れてしまったのか、彼女の「罪」が思いから離れませんでした。人を責めるのって、どこかで気持ちいいですからね。何年間も人を責め続ける人もいるくらいで。

しかし十分間経って、私は決心しました。それで何も言わずに立ち上がり、ベッドの隣でひざまずいてお祈りしました。「主よ、悪かったのは僕です。僕の心が苦い思いで満たされたのは、僕の罪です。告白します。捨て去ります。どうか赦してください。」

それで立ち上がると、どうでしょうか。「でも彼女が言った言葉が……」という思いで心が一杯になりました、またもや。私はもう一度ひざまずきました。

「神様、私の言動が悪かったです。申し訳ありません。責任を取ります。ベツシーが悪かったのではなくて、私が悪かったです。」

それで二度目の屈伸から立ち上がると、今度はどうでしょう。「でも神様は分かっているよね、ベツシーが空気を読めなくて……」。私はもう一度ひざまずきました。「彼女が……」という言葉がもう心に浮かばなくなるまで、四十五分間ひざまずいて祈りました。

今となっては、ベツシーが言った言葉も、私がそのときにしていた仕事も、詳しいことは何も覚えていません。唯一覚えているのは、最後に祈り終わってから立ち上がったことです。で

も苦い思いを悔い改めていなかったら、今となってもベッシーが言った言葉を思い出せるはず
です。恨みというのはそういうものなのですから。

恨みを除き去るためには、まずは苦い思いを持っているのは悪いことだということ。それから
恨みを持っているのは自分の罪なのであって、他人の罪ではないということを抑えなければ
なりません。苦い思いは、他人が謝罪してもなくなりません。「あの同僚」が仕事をやめて
も、また「あの人」が死んだとしても、ダメ。恨みを取り除く唯一の方法は、恨みは聖なる神
に対する罪だということを抑えた上で、罪として告白し、赦しをいただくこと。それ以外に方
法はありません。

ここで一番難しいのは、他人の罪から目を離すことです。でも他人と問題だと思っているそ
の時点で、その人の問題ではないということが分かります。なぜなら、もし本当に他人の問題
で、私の心が蜜と光とで満たされていて、苦い根がなかったとすれば、その人のことを心から
心配できるはず。 「あの人は可哀そうだ。そんな罪を犯したら、私なら心苦しくなってい
まう。きっと彼も心が苦しいだろうな。何かをして助けてあげられないかな。」と言えるはず
です。もしそういうふうにいる心がないとすれば、私の心に苦い根があるのであって、それは
その人の罪ではなく、私の罪なのです。

なぜアメリカにリバイバルが訪れないのか。ここが一つ大きな妨げになっていると思いま
す。クリスチャンがまずは自分の罪を告白するようになれば、他人の罪をも赦せるようになっ
ていくはず。す。

第二章 他人を赦すということ

ジム・ウイルソン

「あなたがたもそれぞれ、心からきょうだいを赦さないなら、天の私の父もあなたがたに同じようになさるであろう。」

(マタイー8章35節)

これは「赦し」について教えておられる主イエス・キリストの言葉です。

誰かから謝罪された経験は誰しも持っていることと思います。また他人に謝罪したこともあるでしょう。

誰かに謝るとき、よく返って来る反応がいくつかあります。その中でも一番多いのは「大したことないよ、大丈夫だよ」という返事かもしれませんね。そう聞くと、とても気さくな印象はありますが、でもこれは「赦します」という意味ではありません。「赦してください」と言っているのですが、その願いは聞き入れてもらっていません。本当に「大したことない」と思っているのかもしれませんが。でも心では「大したこと」と思っているのにも関わらず、公式どおりに「大丈夫だよ」と言っていることの方が多いかもしれませんね。

でも「赦します」というだけでも足りません。イエスは「心から赦すように」と教えましたが。神は心までも見通しておられますから、本当に赦しているのかどうかを見抜いています。兄弟を心から赦さない人については、神は「同じようになさる」のです。正しい言葉を言うかどうかの問題ではありません。「赦します」と言えば、目前の人は納得してくれるかもしれませんが、でも神は知っています。心に赦しがないとすれば、神はその事実を知っています。兄弟を赦さないという罪は神からは隠せません。いえ、私たちの心は、主の前では開いた本。もし頑なに兄弟を赦していない心があるとすれば、神は知っています。

それでは、神は「同じようになさる」と教えられていますが、他にはなんと教えてくださっているのでしょうか。「その時、ペトロがイエスのところに来て言った。『主よ、きょうだいが私に対して罪を犯したなら、何回赦すべきでしょうか。七回までですか。』」（マタイ一章二一節）。「七回までですか」と言ったペテロは、きっと自分は器の広い人だなと思ったでしょうね。

「イエスは言われた。「あなたに言っておく。七回どころか七の七十倍まで赦しなさい。」（マタイ一章二二節）。イエスは「七の七十倍」と言われましたが、それでは四百九十一回目からは赦さなくてもよいのでしょうか。そこまでは指を折って数えていいのでしょうか。他人の犯した罪をノートに控えておいて良いのでしょうか。

相手を赦した回数を数えている人がいるとすれば、その人は一度も赦してはいません。なぜなら、もしその都度、兄弟を心から赦していたとすれば、改めて兄弟を赦すのは、その都度、「初めての出来事」として感じられるはずです。

イエスは他では、頬を差し出さないとも言われましたが、その教えについても誤解している者がいます。「叩かれたら、一回目は頬を差し出そう。でも二度目があつたら殴り倒してやる」と思っているからです。

でも頬を差し出すようにと教えられたイエスの教えの前提にあるのは「心」なのです。あなたが罪を受けた被害者で、相手が悪いということまでは前提です。また相手が七度も、また七十倍も悪いことをしたということ、神が一番知っております。でもあなたが数えているとすれば、そこには心からの赦しはありません。

「そこで、天の国は、ある王が家来たちと清算をしようとしたのに似ている。清算が始まると、一万タラントン借金している家来が、王の前に連れて来られた。しかし、返済できなかつたので、主君はこの家来に、自分も妻も子も、また持ち物も全部売って返済するように命じた。家来はひれ伏し、『どうか待ってください。きっと全部お返ししますから』と懇願した。家来の主君は憐れに思って、彼を赦し、借金を帳消しにしてやった。ところが、この家来は外に出て、百デナリオン貸している仲間の一人に出会うと、捕まえて首を絞め、『借金を返せ』と言った。仲間はひれ伏して、『どうか待ってください。返すから』と頼んだ。しかし、承知せず、行って、借金を返すまでその人を牢に入れた。仲間たちは、事の次第を見て非常に心を痛め、主君に一部始終を報告した。そこで、主君はその家来を呼びつけて言った。『不届き者。お前が頼んだから、借金を全部帳消しにしてやったのだ。私がお前を憐れんでやったように、お前も仲間を憐れんでやるべきではなかったか。』そして、主君は怒って、借金を全部返すま

で、家来を拷問係に引き渡した。あなたがたもそれぞれ、心からきょうだいを赦さないなら、天の私の父もあなたがたに同じようになさるであろう。」

(マタイ18章23〜35節)

私たちは以前死んでいた者でしたが、イエスにあって新しく生まれました。私たちはそのときに赦されましたが、その時に赦された罪の借金は両手に抱えきれないほどのものでした。でもクリスチャンとされた私たちは「無条件」で赦されたのです。その赦しは、神からのプレゼントで、そこには一つとして条件はありませんでした。

「条件付きの赦し」と「無条件の赦し」は同じではありません。私たちは新しく生まれたとき、神から無条件の赦しをいただきました。先ほどの御言葉にあったとおりですが、どうやって返済できないような借金を赦免してもらうようなことでした。コロサイ3章13節ではこのように教えられています。「互いに耐え忍び、不満を抱くことがあっても、赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださいましたように、あなたがたも同じようにしなさい。」主はどのような赦しを私たちにくださったのでしょうか。それはもちろん「無条件の赦し」でした。私たちも同じようにして、無条件で赦すようにと教えられています。でもどうしても私たちに對して罪の借金をしている人となれば、話が変わってきますね。「条件付きの赦し」で考えてしまうのです。だから注意しなければなりません。なぜなら、先ほどの例え話に登場したような悪い僕に對して、天の父は「同じようになさる」のです。

「私たちの負い目をお赦してください。私たちも自分に負い目のある人を赦しましたように。」（マタイ6章12節）。主はこの言葉を祈るようにと教えられました。でも私たちは抵抗を覚えます。「神様、このようには赦さないでください！ 私が人を赦すとおりには、私も赦されるとすれば、私は絶対に赦されません！」

しかしイエスが教えられたとおりに「主の祈り」を祈る人は、ある意味で「条件付きの赦し」を祈っていることとなります。なぜなら、主の祈りを教えた直後で、イエスはこのように教えているからです。「もし、人の過ちを赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたをお赦しになる。」（マタイ6章14節）。本当にそうなのでしょいか。でもこれを言われたのは主イエスなのです。

反論する人がいるかもしれません。「そんなことは…だ。だって私たちは無条件の赦しをいただいているのに。それなのにイエスは条件をつけている。私がお人を赦せば、天の父は私を赦してください。でも私がお人を赦さなければ、天の父は私を赦してください。それって『条件付きの赦し』だよ。」

なぜ「条件付きの赦し」と思うのでしょうか。イエスによれば、私たちが抱えていた大きな借金は、新しい命をいただいたときにすべて帳消しにされました。そのときに、私たちには指示が与えられました。それは「赦されたように、赦さなければならぬ」という指示です。無条件で赦されたのですから、無条件で赦さなければなりません。

したがって、無条件で人を赦している人は、何も思い煩うことなしに「主の祈り」を祈れるはずです。すべての人を無条件で赦しているわけですから、そのとおりに神からも赦されます

からね。したがって、矛盾が生じる唯一の理由は、赦されたとおりに赦していないからです。例え話の中の、兄弟を赦さない悪い僕もそうでした。彼は無条件で赦されましたが、そのはずなのに、自分に対して借金をかかえていた兄弟については無条件で赦していませんでした。

これは何とも恐ろしい言葉ですね。「あなたがたもそれぞれ、心からきょうだいを赦さないなら、天の私の父もあなたがたに同じようになさるであろう。」かたくなに兄弟を赦さないのなら、自分の救いを疑わなければなりません。

「きょうだいがあなたに対して罪を犯したなら、行って二人だけのところでとがめなさい。言うことを聞き入れたら、きょうだいを得たことになる。聞き入れなければ、ほかに一人か二人、一緒に連れて行きなさい。すべてのことが、二人または三人の人の証言によって確定されるようになるためである。それでも聞き入れなければ、教会に申し出なさい。教会の言うことも聞き入れないなら、その人を異邦人が徴税人と同様に見なしなさい。よく言うておく。あなたが地上で結ぶことは、天でも結ばれ、地上で解くことは、天でも解かれる。また、よく言うておくが、どんな願い事であれ、あなたがたのうち二人が地上で心を合わせるなら、天におられる私の父はそれをかなえてくださる。二人または三人が私の名によって集まるところには、私もその中にいるのである。」

(マタイー8章ー5く20節)

これは先ほどの例え話の直前でイエスが教えられたことですが、この箇所も「心からの赦し」について教えています。もし兄弟があなたに対して罪を犯したら、二人だけのところでその罪を指摘しなさい。もし聞いてくれるなら、兄弟関係が回復します。

「そんなことあるか。もうアイツには何回も話してきたよ。僕に対して罪を犯して、それで僕はカンカンだったけど、彼のところに行って話したよ。アイツは耳にも入れてくれなかったけど。」それは赦しの心をもって兄弟と話さなかったからです。この箇所が中々理解しづらいのは、「赦しの心をもって他人の罪を指摘すること」になじみがないからです。「他人の非を指摘して、それで兄弟と回復するなんて考えられない。そんなことをしたら、絶対あの人は守りに回って、私の言うことを聞いてくれないよ。」どうして「守りに回る」のでしょうか。それはもちろん「攻められたから」です。赦しの心をもって兄弟のところに行けば、相手は責められているとは感じないはずですよ。

もし相手を正そうとする人が、心の中で恨みや苦い思い、責める精神をもってしているとすれば、絶対に兄弟関係は回復しません。それは確実に言えます。もしそういう心を持っているのなら、兄弟のところに行ってはいけません。「赦しの心」を持ってはじめて、兄弟のところに行ってよいのです。赦しの心は、相手の悔い改めとは関係ありません。でも確実に言えるのは、もしあなたの心に赦しがないとすれば、相手は絶対に悔い改めません。だから私たちは愛と赦しをもって、兄弟のところに行かなければなりません。そうして、もし聞いてくれるなら、兄弟関係は回復します。

もしあなたの話を聞いてくれないとすれば、もう一人か二人を連れて行かなければなりません。同行する人も「赦しの心」を持っている人でなければなりません。

でもこれは珍しい話かもしれませんね。大体はこうです。一人は責める気持ちでやってきて、もう一人は自分を守ろうと必死になります。それで聞いてもらえるはずもないのですが、それでも片方の話しか聞いていない人が、一人か、二人か、巻き込まれてしまいます。同行している人は偏見を持っているわけですから、三人で彼のもとに行っても、結果は同じです。

でも彼のもとに行く人は、どうしても「赦しの心」を持って、彼のところに行かなければなりません。なぜなら、もし彼がかたくなにも悔い改めないのだとすれば、それは完全に彼の決めたことだということを、白黒つけたいからです。もしかたくなにも悔い改めないとすれば、教会に報告しなければなりません。もちろん、教会にも「赦しの心」がなければいけません。

聖書に従って教会戒規をしていると思っっている教会でも、この点でつまずいていることがあります。なぜなら、「赦しの心」を持っていないからです。まずある人のところに行つて、責め立てる。それから二人か三人を連れて、もう一度彼を責め立てる。それでも聞いてくれないので、今度は教会から除籍される。でも「赦しの心」を持ってやっていたのでしょか。教会戒規の第一目的は、加害者を教会と和解させることなのです。

赦しの心を持ち、加害者を教会と和解させるために話したにもかかわらず、それでも彼が聞かないとすれば、異教徒か徴税人と同様に見なさなければなりません。ここで主イエスが教えられたのは、当時の人々が異邦人や徴税人に対してとっていた態度を取るようには教え

ていないと思います。いえ、イエスはマタイ5章で、父なる神は正しい人にも正しくない人にも正しく接すると教えられました。また敵を愛するようにとも教えています。だから教会から除籍された人を異教徒か徴税人と同様に見なすというのは、「教会外の未信者として、愛をもって接しなさい」という意味で捉えるべきだと思います。除籍された者は部外者とはなりません。それでも本心から彼を愛し、赦しをもって接するべきだということです。彼を教会から引き離れた唯一の理由は、彼が赦しを受け取らないからであって、教会はいつでもよりを戻したいと願っています。この教えを先ほどまで聞いていた弟子たちを代表して、ペテロは聞いたのです。「何回赦すべきでしょうか。」

「愛は：人がした悪を心に留めず：」（第一コリント13章6節【新改訳2017】）。愛は勝負事ではありませんから、スコアブックをとっておいてはいけません。夫婦が言うところをよく耳にしますが、危ないのは「いつも」という言葉。「なんていつもコレをするの。」「なんていつもアレをしないの。」「でも「いつも」という言葉が出るという時点で、誰かがスコアブックを管理しているということになります。事細かく記録しているだけでなく、その記録を残しているのです。赦しの心はそういうことをしません。

イエスは「あなたがたが地上で結ぶことは、天でも結ばれる」とも言われましたが、これはどういう意味でしょうか。「二人か三人」という御言葉はあまりにも文脈から切り離して使われてしまっているのです。元々の文脈を忘れてしまいやすいのですが、これは教会戒規と兄弟を赦すことについての文脈で教えられたことです。ちょうど「イエスの例え話」と「ペテロの質問」の間に言われた言葉です。したがって、「二人か三人」が集まっているところには、確か

に主イエス・キリストもおられますが、「二人か三人」が集まっているのは、教会員に対して罪を犯した人について話し合うためのものです。イエスは教会について教えています。具体的に言えば、イエスの御名によって、赦しの心に満たされた教会について言っています。つまり、「教会がイエスに従っている」という前提があります。そのような教会で、聖書の教えに基づいて信徒を一人除籍するという決断をしたとき、イエスはその決断を尊重するという意味です。

教会が公式をあてはめるようにして教会戒規をやっているのであれば、神はその教会の決定を尊重しません。しかし、教会が主イエス・キリストの人格と愛をもって行動していて、教会の信徒が赦しの心を持っているのに、それでもかたくなに悔い改めようとしない人がいるとすれば、除籍するという決断をしなければならぬときがあります。天におられる神は、そのような決断を尊重すると言われました。

ここは恨みにもつながらず話です。恨みというのは、赦さないこと。誰かから受けたこの仕打ち。誰かから言われたあの言葉。そういうことを赦さずに持ち続けることが「恨み」なのです。恨みに罪の意識が伴わないのも当然です。なぜなら、相手の罪に集中しているからです。

ある意味で、赦しは一方的な話です。ある意味で言えば、イエス・キリストは私たちが悔い改めるよりも前から、私たちを赦してくださいました。私たちが受け取ってはじめて赦しが成立した、というわけではありません。神は天にいながら、かたくなに悔い改めない私たちに對して苦い思いを抱いていたというわけではありませんからね。いや、神は私たちに對して恨みを持ってはいません。私たちが悔い改める前から、私たちに對しては「赦しの心」を持ってい

るのです。だから神の赦しというのは一方的なのです。だからこそ、「一方的に赦しなさい」と私たちに教えているのです。私たちは相手が出たことや相手が言った言葉に気を取られてしまいやすいのですが、でもそこはもはや関係ありません。赦すことは一方的なので、私たちの中で完結する話です。

クリスチャンの心に赦しがあるなら、自分のことを忘れることができます。自分のことよりも、罪を犯した「あの人」のことが心配になるのです。私たちはペテロのようになりやすいですね。「主よ、分かりました。彼を七回は赦します。私も八回目があったら、痛い目にあうぞ…。」でも本当の赦しであれば、回数は数えませんが、もし家族や身内の中で、これまで赦してきた回数を数えてしまう傾向があるとすれば、もしかすると赦していないのかもしれないですね。でも心から兄弟を赦さない者には、天の父が同じようにすると警告されています。だから心から兄弟を赦すようにしましょう。

「でも兄弟を赦す心の余裕はありません。」ともすれば、赦されないといけないのはあなたではありませんか。愛のない心、憎しみの心、悪い態度、怨念。その心では主を喜ぶことはできません。心を新しくしてもらわなければなりませんね。

もちろん赦しのない心をもって教会に行くことも、賛美することもできませんが、でも本心から礼拝を捧げることはできません。自分の口を強制して無理やりに歌わせることは無理ではありませんが、でも心が清められている人は、何も強制しなくとも、自ずと歌うものです。口をおさえても鼻歌が漏れてしまうほどに。どうしてそうなるのでしょうか。それはもちろん、心が清いからです。

主からの喜びを受けるために歌うこと。主にあって喜んでるから歌うこと。ここには大きな差があります。あるクリスチャンは「喜ぶことができるように」という目的で教会に行って賛美をしますが、でも歌い終わった瞬間に喜びも消えてなくなります。なぜか。それはもちろん心が清められていないからです。

私たちは思いたい。自分は何も間違っていないくて、悪いのは「あの人」だと。誰もそうですが、そうとは限りません。「自分の心に赦しがない」、という可能性もあるのです。もし心に喜びがあるとすれば、相手がどんなに悪くとも、また相手の罪がどんなにひどいものでも、心の喜びは消えてなくなりません。

例えば、相手の生き方には明らかな罪があるとしましょう。それでその人に対しては厳しい顔を向けなければならぬときもあるのですが、どうすれば赦しの心をもって注意できるのでしょうか。実際、それほど難しいことではありません。もしあなたに赦しの心があるとすれば、あなたがどれほど厳しい言葉を言ったとしても、相手はあなたの心を汲み取ってくれるはずです。なぜなら、厳しい言葉を言っているあなたの口調に表れるからです。あなたの心に愛があるのかどうかは、相手に伝わります。それが恨む気持ちや嫌う気持ちで厳しい言葉を言われているのか。それとも愛ゆえに言われている言葉なのか。ここは思いのほか、相手に伝わるのです。だから注意しなければならぬのは、言葉よりも心なのです。あなたの言葉を、相手はどう受け取るかは考えなくても大丈夫。結果は主に委ねましょう。あなたの言葉を受け入れないかもしれませんが、でもあなたの心にある愛は必ず伝わりますから。

定期的に、私は非常に厳しいことを言わなければならないときがあります。これは何十年も前のことですが、前年の三月に悔い改めて救いを回復した男がいました。彼がクリスチャンとなったのは大学二年生のときでしたが、本当に悔い改めて心が正されたのは大学四年生のこと。大学を卒業したあとの夏、彼からお願ひされて、数か月私たちのお家に泊まることになりました。子どもたちの寢室を調整して、彼が泊まれる場所をつくりました。その後、六月ごろから、彼が家に来てくれました。

彼が家に荷物を移した日の夕方、妻は二階で子どもたちを寝かしつけていて、私は彼と二人で一階の居間にいました。最近どうかと聞いてみると、彼は答えました。「あんまりうまくは行っていないよ。」

「前と同じ問題？」

「そうですね。」

「同じ女の子？」

彼は頷きました。

その同じ罪を悔い改め、主との関係が回復されたときのこと、つまり前年の三月の話をしました。

「そのときの気持ち、覚えてる？」

彼は答えました。「うん、本当に素晴らしかった。喜びと平安があつて。」

私は言いました。「それなら今から主に告白しよう。今から祈ろう。そうしたらすぐに赦してもらえらるから。告白して、悔い改めて、赦してもらおう。」

彼、「それはできません。」

私、「本当だよ。主は潔いんだから。」

「それは分かりますが……。三月のときもそうでしたし。でも今はまだ心の準備ができていません。」

「違う。心の準備という話ではない。君は悪いって分かっているがやっている。だから悔い改める時は今なんだ。」

「いいえ。今はしません。いずれ悔い改めますが、今はしません。」

「そういうことなら教会に報告するよ。あなたが罪の生活をしているということ。」

「え、これは内々で話したことなのに。それを教会に広めるんですか。」

「秘密だとは聞いていないよ。あなたがこういう内容を教えてくれるともわからなかったし、それを言った上で、かたくなに悔い改めないとも知らなかったよ。でも神様は言ってる。もし悔い改めない人がいれば、教会に報告しなければならない。あなたが悔い改めないのなら、あなたとは食事はしない。姦淫を犯している兄弟をどうしなければならないのかは聖書にはつきりと書かれている。教会はこの点でしっかりしていないから、きつと私が『噂の罪』で追い出されることになるんだらうけど。それでも聖書では、教会に報告しなければならないと教えられている。だから教会に報告するし、それから兵学校のキリスト者学生会にも報告しなければいけない。兵学校は一瞬だよ。報告した日の内には、あなたは奉仕から外される。」

彼は怒りました。

私は続けました。「それだけじゃない。第一コリント5章では、一緒に食べてもいいけど言われている。自分を信者と呼びながら不品行を行う人とは交わりを持ってはならないと。兄弟と言いながら、あなたの生き方をしている人とは一緒に食事はできません。悔い改めたくないのはあなたのわがままだけど、その罪に私を巻き込むことになる。罪の生活を悔い改めないあなたと共に食べて、共に交わりを持つようにとあなたから言われているんだからね。もう荷物は部屋に入れておいてるだろうから、今夜は泊って行ってもいい。でも明日の朝までに悔い改めて、主との関係を回復していかないなら、家を出て行ってもらう。朝食前に。それまでは妻とも、子どもとも話してはならない。」

彼は非常に怒りました。

私は続けました。「私はあなたを愛しているんだ。それはあなたが一番よく知っているはず。夏の間はずっと泊っていいんだよ。でも主との交わりがないなら、私たちも遠慮する。まずは主と回復しなさい。そうすれば、明日一緒に朝食を食べよう。」

彼は愛されているということ、また私が決して恨んではいけないということをよく知っていました。私の愛には裏がないということも。でも例えば同じ言葉を、苦い心をもって話したとすれば、絶対に聞いてもらえなかったはず。しかし彼は、次の朝にはもう悔い改めて、主との関係を回復していました。夏の間はずっと家に泊って行ってくれました。

赦しというのは、訓練や教会戒規とは矛盾しません。教会戒規があるからと言って、赦がないというわけではありません。

まずは神との時間をもって、家の掃除をしましょう。もし誰かに対して赦せない気持ちがある
とすれば、心から赦しましょう。神は私たちの祈りを真剣に聞いているのです。あなたが祈
ったその瞬間に、あなたは赦されます。

第三章 人の怒り

(ヘザー・ウィルソン)

誰かに車をぶつけられた。怒りが湧いてくる。ぶつけたのは十六歳の男の子。免許取り立てで無謀な運転をしていた。もちろんその子に対して怒っているけど、でもいつの間にか現代の若者全体、そしてこんなに無責任な人間に免許証を渡して何とも思わない社会に対しても腹が立ってくる。そんな時に限って現れる近所のクリスチャンの方から、「すべての怒りと憤りを捨てなさい」と言われたら……。もう我慢の限界です。「きれいごとを言うな!」と言いたくなるでしょう。「簡単に言うな! 聖書にも怒っていいって書かれているじゃないか。イエスだって、神殿から商人たちを追い出したときは怒っていただろうし。それに、怒りを抑えるのは身体によくない。偽善者になるより、本音を出したほうがマシだ。」

こうして私たちは、怒りを正当化するための言い訳を並べ立てます。実のところ、誰もがこのような言い訳を耳にしたことがあるでしょう。自分で使ったこともあるかもしれませんが。それでも誰かが「神が望んでいる怒りはそんな怒りではない」と指摘するものなら、その人さえも怒りの対象に加えられてしまいかねませんね。

本当に些細なこと（つまり、私たちからすれば些細なこと）で激昂する人もいます。例えば、職場の効率の悪さ、駐車場で横入りされること、靴下を放ったらかしにする夫、時間を守れない妻、等々。これくらいのもので怒ってしまうのが人間ですよ。

また、これと比べればもっと大きなことで、言わば「正当な理由をもって」怒りを覚える人もいます。例えば、飢饉、中絶、戦争、社会的不平等、差別、等々。私たちはいろいろなことで怒りを覚えます。しかし、きっかけが何であれ、聖書は怒りについて明確に語っておられません。

怒りを正当化しようとする人がよく引用する御言葉は、エペソ4章26節です。「怒ることがあっても……でも26節はここまでではありませんね。後半を忘れてはなりません。「怒ることがあっても、罪を犯してはなりません。」この命令の前半には敏感で、後半には鈍感なのが私たちです。しかもこの一節にはさらにこうあります。「日が暮れるまで怒ったままではいけません。」

またこの他にも怒りを許容しているかのように読み取れる御言葉があります。「私の愛するきょうだいたち、よくわきまえておきなさい。人は誰でも、聞くに速く、語るに遅く、怒るに遅くあるべきです。」（ヤコブ1章19節）。ここを読む限りでは、すぐに怒っているわけではなくれば、怒ってもよさそうですね。でも次の節もあわせて考えなければなりません。「人は誰でも……怒るに遅くあるべきです。人の怒りは神の義を実現しないからです。」（ヤコブ1章20節）。

したがって、怒ってもよいときの条件は次の五点となります。

- ・ 罪を犯さないこと。
- ・ 怒りが日をまたがないこと。
- ・ 「人の怒り」ではなく、「神の怒り」だということ。
- ・ 神の義を実現する怒りだということ。
- ・ 怒りに遅いこと。

この条件をすべて満たすときだけ怒っているとすれば、怒る機会はかなり減ると思いませんか。

もう一つ引用される箇所は、イエスが宮を清めた場面（マタイ21章、ヨハネ2章）です。でも「宮清めのイエス」を根拠として、私たちの怒りを正当化するのは危険だと思います。なぜなら、私たちの怒りは大抵、イエスの怒りほど、義にかなっていないからです。さらに言えば、宮清めの記述の中では「イエスが怒っていた」とは言われていません。怒っていたとしても、先ほどの条件を満たしていた怒りだったでしょう。すなわち、イエスの怒りは神の怒りの表れで、自己中心的な理由によるものではありませんでした。イエスは神の宮を清めようとしていたのです。その結果、宮は清められ、神の義が実現されました。その怒りは神の怒りでしたから、罪ではありませんでした。イエスは鞭をつくるほどの時間がありましたから、冷静だったはずで、カッとなっていたのではありませんし、日をまたぐような怒りではありませんでした。

それでイエスの怒りと比べるには及ばないとき、私たちがよく使う口実は「あなたには分らないんだ！」——そう言いたくなる時があります。そうかもしれないね。私には分からな
いかもしれませんが、でもイエスは必ず分かっています。「この大祭司は、私たちの弱さに同
情できない方ではなく、罪は犯されなかったが、あらゆる点で同じように試練に遭われたので
す。」（ヘブル4章15節）。キリストは私たちの弱さに同情してくださる方ですが、そこで
は終わりません。いえ、私たちには時に適って、恵みを与えてくださるのです（16節）。

あるいは、もっと現代的な言い方をするなら、「怒りを溜め込むより吐き出した方が身のた
めだ」と言う人もいます。確かに、怒りを溜め込めば、胃に穴が開くかもしれませんね。でも
胃液を吐き散らすのはどうでしょうか。周りの人の胃がやられてしまうかもしれませんね。こ
こで忘れられがちな「第三の選択肢」があります。私たちの怒りを神に持つていくことができ
るのです。もちろん神に文句をぶちまけるということではありません。いえ、言わはこのよう
な祈りを心から祈ることです。「神様、私は今怒っています。この怒りがあなたの義を実現し
ないとすれば、私の怒りを取り去ってください。」そうすることで、もし不当な怒りだとすれ
ば、神が私たちの怒りを取り除いてくださいます。いずれにせよ、私たちは主の喜びのうちに
歩むことができますから、誰も胃潰瘍にはなりません。

怒りが許されるような条件は幾つかあります。でも聖書が強調して教えているのは、怒りの
愚かさや罪深さです。「しかし今は、そのすべてを、すなわち、怒り、憤り、悪意、冒瀆、口
から出る恥ずべき言葉を捨てなさい。」（コロサイ3章8節）。また「怒り」は肉の行いの一
つとして挙げられています（ガラテヤ5章20節）。また箴言でもこのように教えられていま

す。「怒りやすい者はいさかいを引き起こし、激しやしい者は多くの背きを犯す。」（箴言29章22節）。「怒りを遅くする人は英知を増す。短気な者はますます無知になる。」（箴言14章29節）。

それではもしあなたの怒りが神から来ているものではないという自覚があり、心にある怒りを捨て去りたいという願いがあるとすれば、どこから始めればよいのでしょうか。

まずは、自分の怒りがどこから生じたのかを見極める必要があります。「善い人はその心の良い倉から良い物を出し、悪い人は悪い倉から悪い物を出す。およそ心から溢れ出ることを、口は語るのである。」（ルカ6章45節）。つまり、私たちの言動は心の表れなのです。もし心に溜めているものが悪いものだとすれば、その心から溢れ出るものも悪いものとなります。

だから何よりもまずやらなければならぬのは、神に心を探っていたかどうかです。例えば詩篇139篇23〜24節を祈りましょう。「神よ、私を調べ、私の心を知ってください。私を試し、悩みを知ってください。御覧ください、私の内に偶像崇拜の道があるかどうか。とこしえの道に私を導いてください。」神に心を探っていたかなければなりません。

それから第二に、神が見せてくださった心の罪を、神に告白しましょう。「しかし、神が光の中におられるように、私たちが光の中を歩むなら、互いに交わりを持ち、御子イエスの血によってあらゆる罪から清められます。∴私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、あらゆる不正から清めてくださいます。」（第一ヨハネ1章7、9節）。このようにして、まるで宮から追い出された商人のようにして、私たちの怒りも心から消えてなくなるでしょう。

心が清められたら、今度は心を良いもので満たすべきです。「すべて真実なこと、すべて正しいこと、すべて正しいこと、すべて清いこと、すべて愛すべきこと、すべて評判のよいことを、また、徳や称賛に値すること…」(ピリピ4章8節)。このようなものを心に留めるようにしましょう。これこそがパウロの教えている「心を新たにしていたくこと」(ローマー2章2節)なのです。

「怒りをすべて捨てるなんて、とても無理だ」と思いますでしょうか。もし私たちの力だけで怒りをすべて捨てなければならぬとすれば、その通りです。でも神に感謝しましょう。なぜなら、「あなたがたを守ってつまずかない者とし、傷のない者として、喜びの内に栄光の御前に立たせることができる方」(ユダー1章24節)がいらっしゃるのです。アーメン。

追記..

「もっと自分を愛しなさい」という内容の標語が飛び交う世の中で、もしかして自分を愛しすぎているかもしれないと疑う人は少ないと思います。でも怒りはほとんどの場合、他人を守るために湧いてくるものではありません。いえ、怒りは十中八九、自分を愛しすぎているために生じる反応です。「こんなにいい人の私がこんなふうに使われるのは不当だ。」その結果、怒りが生じるのです。もしあなたの怒りに自制がないとすれば、それは未信者の特徴です。イエスは、ガラテヤ5章19と21節に羅列されている「肉の行い」から私たちを救い出し、5章22と23節にある「霊の結ぶ実」へと導いてくださいます。もしあなたがもうすでに救わ

れてクリスチャンとなっていて、それでも怒りに関して自制を利かせられていないとすれば、今日のうちにその罪を告白し、捨て去らなければなりません。

(ジム・ウィルソン)

第四章 発作的な怒り

ジム・ウイルソン

「肉の行いは明白です。淫行、汚れ、放蕩、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、嫉妬、怒り、利己心、分裂、分派、妬み、泥酔、馬鹿騒ぎ、その他このたぐいのものです。以前も言ったように、ここでも前もって言いますが、このようなことを行う者は、神の国を受け継ぐことはありません。」

(ガラテヤ5章19〜21節)

「これに対し、霊の結ぶ実は、愛、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制であり、これらを否定する律法はありません。キリスト・イエスに属する者は、肉を情欲と欲望と共に十字架につけたのです。」

(ガラテヤ5章22〜25節)

私は非常に恐ろしい体験をしたことが何度かあります。あるとき、不貞を働いていた牧師に面と向かって話をしに行きました。彼は別居していた妻と十代の娘たちに会いに来ていました。私と話しているうちは落ち着いていましたが、妻と娘の一人に対して怒りを爆発させまし

た。彼は一度帰りましたが、いつ戻って来るのか分かりませんでしたので、ドアに鍵をかけました。すると、少し経ってから彼はかえってきて、ドアを激しく叩きはじめました。それから彼女たちが住んでいたトレーラーハウスを倒そうと、揺らし始めました。結局、彼は浮気相手と結婚しました。その十年後に悔い改めました。

これも何年も前のことですが、ある夫婦を和解させるために、私はベツシーを連れて、二人のところを訪問しました。そこに行ってみると、「あの女」もいました。浮気相手の女性は逆上しました。誰も怪我はしませんでした。でも車は無事では済みませんでした。彼女はクリスチャンではありませんでした。

またある時、私の経営するキリスト教書店に、ある男がなだれ込みました。男は怒り狂って、「うちのヤツを殺すぞ！」と言ってきました。私たちは無事に彼の妻をかくまい、彼の怒りが収まるまで彼女を保護しました。彼もクリスチャンではありませんでした。

発作的な怒りは罪の性質の行いです。特に幼い子どもであれば、分かりやすいですね。いわゆる癩癪かんしやくです。子どもが成長してくれば、親は皮肉混じりに「怒りん坊だね」と言ったりしますが、それでも怒りは収まりません。他にも「キレル」とか、「ブチギレル」といった表現もあります。発作的な怒りの目に見える様子をよく描写している表現ではありますが、でも罪深さはあまり感じさせません。

すぐに怒る人のことを表す婉曲表現として「短気」とも言います。私たちの身の回りにもきつとそのような人が一人か二人はいると思います。ある人は短気だということにプライドさえ

感じているようです。周りにいる人は、その人を警戒して、逆鱗に触れないようにと細心の注意を払います。逆に言えば、すぐに怒りを着火させてしまうその人は、周りの人を人質のようにして、脅かしているのです。

罪の性質の行いに相反して結ばれる実は「霊の結ぶ実」です。一番わかりやすい例が「自制」ですね。でも怒りの対極にあるのは「自制」だけではありません。いえ、怒りを噴火させている人には、愛も、喜びも、平安も、寛容も、親切も、善意も、誠実も、柔和もありません。発作的な怒りは、霊の結ぶ実をすべて台無しにします。だから霊によって生まれていない者が、怒りに身を任せるのは自然なことなのです。

でも霊によって生まれている者には、発作的な怒りは不自然なことであって、許されるべきことではありません。それでもどうして発作的に怒りに駆られるクリスチャンがいるのでしょうか。もしその人が本当にクリスチャンなのだとなれば、それは悔い改めていない小さな罪の積み重ねがあって、その罪を告白せずに溜め込んでしまった結果です。赦しをいただいていない罪があるので、小さな誘惑に対しても対抗できずにいる。それで怒りに駆られる誘惑についても、流されるままに怒りを噴火させてしまうのです。このような罪の蓄積に関して、ダビデはこのように書いています。「あなたの僕を傲慢から引き離し、これに支配されないようにしてください。その時、私は全き者となって、多くの背きの罪から解き放たれるでしょう。」

(詩篇19篇13節)。ダビデはこのようにして罪を溜め込んでしまうことがないように、未然に防ぐ力を求めて祈っています。発作的な怒りに陥ってしまうクリスチャンは、ダビデのようにして「傲慢に支配されないように」と望んできませんでした。それでいざ傲慢に支配され

てしまうと、目の前には重大な背きの罪があつて、その誘惑に勝つ力が干上がってしまったのである。

発作的な怒りから自由になるためには、これまで発作的に怒りを噴火させたときを一つ一つ神の前で告白し、悔い改めなければなりません。その際、罪を軽く見せるような婉曲表現を使わないこと。また、発作的な怒りにいたらせた小さな傲慢の積み重ねも告白すること。ここが極めて大切です。

「あなたがたはキリストと共に復活させられたのですから、上にあるものを求めなさい。ここでは、キリストが神の右の座に着いておられます。上にあるものを思いなさい。地上のものに思いを寄せてはなりません。あなたがたはすでに死んで、あなたがたの命は、キリストと共に神の内に隠されているからです。あなたがたの命であるキリストが現れるとき、あなたがたも、キリストと共に栄光に包まれて現れるでしょう。」（コロサイ3章1〜4節）。この教えは、怒りや憤りをはじめ、その他の多くの罪を防ぐための土台です。これはクリスチャンにしかできません。なぜなら、キリストの内になければ、この教えを实践することができないからです。

私たちの心と思いが、キリストにあつて整理されてはじめて、このような戒めが与えられています。「しかし今は、そのすべてを、すなわち、怒り、憤り、悪意、冒瀆、口から出る恥ずべき言葉を捨てなさい。」（コロサイ3章8節）。

この命令は、神の子に与えられたものです。つまり、信仰を持たない未信者に対して与えられたものではありません。だからと言って、未信者であれば、怒りや憤りをあらわにしても構

わないという意味ではありません。いや、未信者は、怒りを捨てることに関して言えば、無力だという意味です。悔い改め以外に、怒りや憤りから解放される道はありません。したがって、未信者は根本から始めなければなりません。まずは自分の罪を神に悔い改め、イエス・キリストが主であることを口で告白し、心で信じる必要があります。また、キリストが自分の罪のために死んでくださり、三日目に復活されたことを信じなければなりません。

「メシアは苦しみを受け、三日目に死者の中から復活する。また、その名によって罪の赦しを得させる悔い改めが、エルサレムから始まって、すべての民族に宣べ伝えられる。」

(ルカ24章46〜47節)

「口でイエスは主であると告白し、心で神がイエスを死者の中から復活させられたと信じるなら、あなたは救われるからです。」

(ローマー0章9節)

第五章 気分を悪くすること

ヘザー・ウイルソン

「愛は…礼を失せず、自分の利益を求めず、怒らず、悪をたくらまない。」

(第一コリントー3章4〜5節)

ヤコブの手紙によれば、もしある人が舌を制することができるとなら、その人はほとんど完全な人で、体全体をうまく制御することができます。でも問題は、舌を制することをまだ学んでいない不完全な人が多いのです。だから私たちは言葉で傷つけ、傷つけられてしまいます。でも人を傷つけるのは「言葉」だけではありません。「行動」で傷つけることも可能です。だから私たちが傷つかなかったためには、私たちの周りにいるすべての人に言葉と行動を慎んでもらわなければなりませんね。

傷つくことに関して言えば、私たちはすべての責任を「加害者」の足元に置き、「被害者」には責任を問いません。もちろん舌を制御することは大切なことですから、その重要性を小さく見せるつもりはありません。でも私たちの周りにいるすべての人が舌を制することができます。私たちに、「傷つく権利」はあるのでしょうか。私たちは、周りの人が完全になるまで、一つ一つのことで傷つかなければならないのでしょうか。いえ、そんなことはありません。

ん。傷つけ合わない世界になるためには、二通りの道がありますから。「傷つけない人」を目指すのはもちろんのこと、「傷つけない人」になることも大切だと思います。

私たちが傷つくことも、気分を悪くすることもないほどに、周りの人がいつも優しくかったら…と思うことがあります。でもそれは現実的ではありません。だから、その前に、まずは私たちが傷つかないように強くなければなりません。

強くなるためには、キリストの模範にならなければなりません。

「彼は軽蔑され、人々に見捨てられ

痛みの人で、病を知っていた。

人々から顔を背けられるほど軽蔑され

私たちも彼を尊ばなかった。

…彼は虐げられ、苦しめられたが

口を開かなかった。」

(イザヤ53章3, 7節)

もし私たちが同じ状況に置かれたら、傷ついて当然だと思うことでしよう。「それならも

う、①彼らとは二度と話さない、②もう親切にはしない、③赦さない、④ましてや命を捧げるなんてとんでもない」と思うでしょう。しかしこれがもし主の反応だったとしたら、十字

架に行くことはなかったのです。もちろんイエスは特殊な例ではありませんし、その裏には神の力がありませんがね。イエスは完全で、私たちは不完全ですから。

それでも私たちは、この点においてもイエスの例にならいたいものです。

「互いにこのことを心がけなさい。それはキリスト・イエスにも見られるものです。

キリストは

神の形でありながら

神と等しくあることに固執しようとは思わず

かえって自分を無にして

僕の形をとり

人間と同じ者になられました。

人間の姿で現れ

へりくだって、死に至るまで

それも十字架の死に至るまで

従順でした。」

(ピリピ2章5〜8節)

まずは次の四点で、キリストと同じ思いになりましょう。

・自分の権利に固執しないこと。

- ・自分を無にすること。
- ・仕える者となること。
- ・へりくだること。

このような心の姿勢を持つ者は、前に置かれている喜びのために、十字架の恥をもものともせず耐え忍ぶことができず（ヘブル―2章2節）。

基本的に言えば、私たちを一番傷つけるのは、心に近い人です。見知らぬ人よりも、夫、妻、友人、兄弟の言動の方がはるかに大きなものとして目に映ります。身近な人に傷つけられるとき、私たちは心の中でこう言います。「もしあの人が本当に私を愛していたら、そんなことは言わないはずだ。」でももう一歩だけ踏み込んでみましょう。相手に愛が足りていないのはそうとして。でも私たちの中から湧いてくる思いは、「愛が足りていない相手を助けようとする思い」ではなく、「相手の愛のない言動がいかに関係しているのか」ということ。つまり、私たちは自己中心な思いで、相手のことではなく、自分のことばかり考えてしまっているのです。

愛に関して教えている有名な箇所として、第一コリント―3章があげられます。そこでは、このように教えられています。「愛は…礼を失せず、自分の利益を求めず、怒らず、悪をたくらまない。」

私たちが傷ついてしまうのは、私たちの心に「赦しの蓄え」がないからです。赦しのあるところでは、悪をたくらみません。エペソ4章32節には「互いに親切で憐れみ深い者となり、

神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださいましたように、互いに赦し合いなさい。」とも教えられています。私たちは赦されたようにして赦さなければなりません。この命令には際限はありません。主はどんな罪人でも赦してくださいますから、私たちも同じようにして赦さなければなりません。

主はすべての誘惑に対して、「逃れの道」を備えておられます。ともすれば、私たちはこれから傷つく必要は一切ないはずですね。傷つかないなんて及びもつかないことで、不可能だと思ふ人もいるかもしれません。それでも私は信じています。今までは傷ついていたところを、主にお願ひしましょう。主は約束しておられますから、必ず「逃れの道」を与えてくださいます。

追記..

この章では「強くなる」という表現が用いられましたが、その意味するところは心を閉ざすことや、その他の自己防衛策を練ることではありません。そのような策はうまくいかないだけでなく、むしろ結果として、心を硬くしてしまうだけです。「強くなる」とは、第一ペテロ2章2-3節のようにして、イエスの模範に従うという意味です。イエスは、決して心を閉ざすことも、硬くすることもなく、弱い状態のままでおられました。傷つかないための最善の方法は、イエスに従い、心を開くことです。そのような人は柔らかい心のままでいられます。人の言動に対して心を閉ざすのではなく、ただ受け流すのです。実際、その方が痛みも少ないのです。

ジム・ウイルソン

第六章 舌を制すること

クリス・ヴィラコス

「あらゆる種類の獣や鳥、地を這うものや海の生き物は、人類が治めており、また治めてきました。しかし、舌を治めることのできる人は一人もいません。舌は、制することのできない悪で、死をもたらす毒に満ちています。」

(ヤコブ3章7〜8節)

以前、ニューヨークで磁気嵐が発生し、ある電話回線が近くのラジオ局の電波に干渉し、その会話がラジオで放送されてしまうという出来事がありました。話していた当人たちは全く気づきもしませんでした。二人の会話は全国放送されてしまったのです。

私たちは皆、一度や二度は噂話をしたことがあるでしょう。実際、多くの教会では、記録係の天使が涙を流しながら書記をしなければならぬほどの噂話があります。これは神の目には重大な罪で、私たちがすぐにもやめなければならぬことです。

パウロは第一テモテ3章1節でこう語っています。「気品があり、人をそしらず、冷静で、あらゆる点で忠実な人でなければなりません。」これは女性について教えている箇所ですが、男性がこの病から免れていると思っはなりません。パウロは第二テモテ3章で、終わり

の日には、人々が「情けを知らず、和解せず、人をそしり、自制心がなく、粗暴になり、善を好まない人」になると語っています（第二テモテ3章3節）。

この二つの箇所、「人をそしる」という表現が用いられています。原語で使われているギリシア語の単語は「ディアボロス」です。悪魔を指す英語の「デビル」は、この単語から派生した言葉です。したがって、「そしりの守護聖人」が誰なのかについては聖人暦で調べるまでもなく、答えが分かり切っています。陰口をする者は、悪魔の御用達であり、悪魔の郵便配達屋にすぎません。

この「ディアボロス」は、しばしば「中傷者」とも訳されます。つまり、陰口は誹謗中傷なのです。パウロは第二テモテ3章で、人をそしる噂話を他の凶悪な言動と並べて記しています。噂話というのは、それほどに深刻なことなのです。

残念なことに、無自覚で陰口を叩いてしまうことも多いものです。では、自分の言葉が陰口にあたるかどうかを判断するための基準はあるのでしょうか。第三者のことについて、他人に何かを話したくなったときには、以下の四つの質問を考えてみましょう。一つ判断の目安になると思います。

① この話をする動機は何ですか？

第三者を批判することが本当の動機ではありませんか。その人を助けようとして話し

ているのか、それとも傷つけようとして話しているのか。形は「祈りの課題」として話してはいても、その中身が陰口になっていることが少なくありません。また、隠れた動機として、自分をよく見せるために他人を下げようとしていることもあります。この質問にどう答えるかに注意してください。第三者について否定的なことを言おうとするときに、自分の言葉を正当化し、言い訳しようとしているのなら、あなたはもしかして、そしりの戸口に立っているのかもしれない。

② この話には別の視点はありますか？

陰口は噂話と表裏一体です。もし話の内容が正しいのかどうかを確認していかないのであれば、それは噂話です。誰かが言ったことですが、教会で一番問題を起こすのは、「知っていることを全部話す人」よりも、「知らないことまでも話してしまう人」かもしれません。

③ この話はイエスが同席しててもできますか？

他人にまつわる否定的な情報をイエスに話した後、主はどのように答えられるでしょうか。きっとヨハネ21章22節のように、「あなたに何の関係があるか」と問い返されるでしょう。つまり、イエスに話すとなると気が引けるなら、他の誰かに話すのも適切だということです。

④ この話をするので、聞き手は励まされますか？

チャールズ・スポルジンはかつて、陰口についてこのように教えました。「陰口には三重の毒がある。語る人、聞く人、そして話題になった人の三者を毒するのである。」ここでパウロの忠告をよく心に留めるべきです。「悪い言葉を一切口にしてはなりません。口にするなら、聞く人に恵みが与えられるように、その人を造り上げるために必要な善い言葉を語りなさい。」（エペソ4章29節）。

この質問に正直に答えることで、これから話そうとすることが陰口なのか、あるいはそしりになるのかどうかを判断できるようになります。もしそれでもまだ確信が持てない場合には、どうしても話さなければならぬことでもない限り、話さないことが安全です。

最後に一つ。陰口という罪の習慣をどうやって断ち切れれば良いのでしょうか。これは私たちの生活をむしろむだだけでなく、教会をも破壊する害悪です。その解決法は二つあります。

① 広めないこと。

陰口とは、片耳から入って口から出るものです。舌を制御しましょう。誰かについて良いことが言えないなら、何も言わない方がよいのです。

② 聞かないこと。

聞く耳がなくなれば、語る舌もなくなりませう。陰口をする人を引き立ててはいけません。言われた内容をすぐに鵜呑みにして信じるのではなく、その人の良い点に会話を方向転換させましょう。これが、そしりや陰口を最も速く止める方法です。

言葉には足も羽もないのに、それでも噂の広まる速さは恐ろしいですね。そのような陰口は、社会生活や教会生活を毒し、リバイバルの働きを妨げるのです。ときに礼拝堂にハチが入ってくることもあります。この悪魔的な害虫、そしりなるものを教会から根絶しようではありませんか。

「なお、きょうだいたち、すべて真実なこと、すべて尊いこと、すべて正しいこと、すべて清いこと、すべて愛すべきこと、すべて評判のよいことを、また、徳や称賛に値することがあれば、それを心に留めなさい。」

(ピリピ4章8節)

第七章 内省

ジム・ウイルソン

「しかし、神が光の中におられるように、私たちが光の中を歩むなら、互いに交わりを持ち、御子イエスの血によってあらゆる罪から清められます。」

(第一ヨハネ一章7節)

内省とは、自分自身の過去の行動や感情を黙想する行為や習慣のことを言います。過去の言動が私たちの意識に上るときに、あえてそれに集中し、自らを省みて評価することです。内省することは良いことだとしばしば思われています。なぜなら、過去（「遠い過去」や「最近の過去」）が現在の行動や感情の原因、あるいは説明になると考えられているからです。自分を顧みて吟味するようにと他人から言われなくとも、多くのクリスチャンは定期的に自省の念にふけます。

しかし、内省は夏の日差しの中を歩くようなものではありません。むしろ、それはくすぶるろうそくを手にとって地下牢への階段を下りていくようなものです。その小さな灯りは長い影を投げかけ、骸骨やクモの巣、気味の悪い這い回るものたちをかすかに照らします。そこに

は、私たちの過去の言動、私たちがした恥ずかしい思い、そして想像したことさえも含まれています。

内省にとりつかれている人は、この死の地下牢にますます深く入り込むか、同じ骸骨を何度も何度も点検します。しかし、ろうそくの光はとて弱いもので、取り返しのつかない恐ろしい過去に対する解決策とはなりません。だから過去の言動に囚われることは喜びの源にはならず、むしろ鬱の原因になります。憂鬱で完璧主義的な性格を持っている人をうつ病に追い込むのは、内省が一番大きな原因かもしれません。

裁き主の宣告

内省は言います。「お前はひどい人だ!」「なんてことをしたんだ!」「もう主はあなたを受け入れてくださらない。」「もし私が神だったら、私を赦さないだろう。」「内省に励まされありません。落ち込むだけです。罪を自覚させてくれるならまだしも、罪の自覚を生む代わりに、過去の罪を責め立てるだけなのです。」

法廷において、「検察官」と「裁判官」は異なる存在です。検察官は罪を証明しようとし、裁判官は有罪が証明されたかを判断します。裁判官が「無罪」と判断した瞬間、裁判は終了します。しかし、検察官はたとえ裁判官が無罪と言っても、なおも「この人は有罪だ」と言い続けるかもしれません。

聖書において、サタンはいわゆる「検察官」であり、聖霊はいわゆる「裁判官」です。

完全な光

内省と内省が結ぶ苦い実にとってかわる代替案は、第一ヨハネ一章5〜10節にあります。ここでは5節と7節を引用します。「私たちがイエスから聞いて、あなたがたに伝える知らせとは、神は光であり、神には闇が全くないことです。：しかし、神が光の中におられるように、私たちが光の中を歩むなら、互いに交わりを持ち、御子イエスの血によってあらゆる罪から清められます。」

この光は、すべての光の源です。それは暗闇の中でくすぶるろうそくのような光ではありません。その光の中には全く闇はありません。ヤコブ一章7節ではこのように教えられています。「あらゆる良い贈り物、あらゆる完全な賜物は、上から、光の源である御父から下って来なのです。御父には、変化も天体の回転による陰もありません。」

この完全な光の中を歩むなら、何も隠れることはありません。そうするとき罪意識は絶えずつきまとう検察官のようではなく、その都度、「有罪」あるいは「無罪」の判決が下されます。有罪であれば、罪を告白したその瞬間に赦されます。なぜなら、イエスの血が絶えず私たちを清めてくださるからです。交わりは何もなかったかのようにして元に戻ります。私たちは光の中におり、継続的にきよめられています。こんな「裁き」と「清め」の自然な結果として生まれるのが従順なのです。

イザヤの例

この「裁き」↓浄め↓交わり↓従順」の素晴らしい例が、イザヤ書6章1〜8節にあります。

「ウジヤ王が死んだ年、私は、高く上げられた玉座に主が座っておられるのを見た。その衣の裾は聖所を満たしていた。上の方にはセラフイムが控えていて、それぞれ六つの翼を持ち、二つの翼で顔を覆い、二つの翼で足を覆い、二つの翼で飛んでいた。そして互いに呼び交わして言った。

『聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな
万軍の主。』

その栄光は全地に満ちる。』

その呼びかける声によって敷居の基が揺れ動き、神殿は煙で満ちた。私は言った。
『ああ、災いだ。』

私は汚れた唇の者

私は汚れた唇の民の中に住んでいる者。

しかも、私の目は

王である万軍の主を見てしまったのだ。』

すると、セラフイムの一人が私のところに飛んで来た。その手には祭壇の上から火箸で取った炭火があった。彼はそれを私の口に触れさせ、言った。

『見よ、これがあなたの唇に触れたので
過ちは取り去られ、罪は覆われた。』

その時、私は主の声を聞いた。

『誰を遣わそうか。』

誰が私たちのために行ってくれるだろうか。』

私は言った。

『ここに私がおります。』

私を遣わしてください。』

(イザヤ6章1〜8節)

イザヤが自分の罪に気づいたのは、なぜでしょうか。罪意識が生まれたのは内省の結果ではなく、神の臨在の中にいたからです。イザヤは光の中にいました。そうしたら自分の罪については黙っていられませんでしたし、隠すこともできませんでした。そうしてイザヤは罪を告白しました。すると、イザヤはすぐに赦され、いざ赦されると従順に従う備えができていたので、す。

読者の皆さんは「そんなに早く赦されたことなんてない」と思うかもしれませんが、それは、判決を下す裁き主（聖霊）ではなく、告発する検察官（サタン）の声を聞いてきたからではないでしょうか。しかし検察官は誰かが赦されることを望んでいないのです。

光の中を歩む

今度、内省の傾向に陥りそうになったときには、その誘惑を拒否してください。内省する代わりに、光の中へ行きましょう。どうすれば光の中に行けるのでしょうか。詩篇―39篇23〜24節を祈りましょう。

「神よ、私を調べ、私の心を知ってください。
私を試し、悩みを知ってください。

御覧ください

私の内に偶像崇拜の道があるかどうかを。

とこしえの道に私を導いてください。」

(詩篇―39篇23〜24節)

中ではなく、上を見て歩きましょう。自分で自分の罪を探し出そうとする必要はありません。神とイエス・キリストの完成された御業のもとに来た方ははるかに良いのです。その方ははるかに早く、はつきりと、また解決を伴って罪が示されるのです。

第八章 他人の恨みをどうすればいいですか？

ジム・ウイルソン

他人から恨まれることを避けるためには、どうすべきでしょうか。次の御言葉を読んでみましょう。

「偶像に献げた肉について言えば、私たちは皆、知識を持っている、ということはお確かです。しかし、知識は人を高ぶらせるのに対して、愛は人を造り上げます。ある人が、何かを知っていると思っているなら、その人は、知らねばならないように知ってはいないのです。しかし、神を愛する人がいるなら、その人は神に知られています。そこで、偶像に献げた肉を食べることについてですが、この世に偶像の神などはなく、唯一の神以外にいかなる神もないことを、私たちは知っています。…ただ、あなたがたのこの強さが、弱い人々のつまずきとならないように、気をつけなさい。知識のあるあなたが偶像の神殿で食事をしているのを、誰かが見たら、その人は弱いのに、その良心が強められて、偶像に献げた肉を食べるようなことにならないでしょうか。そうすると、その弱い人は、あなたの知識によって滅びることになります。しかし、このきょうだいのためにも、キリストは死んでくださったのです。このように、きょうだいに對して罪を犯し、その弱い良心を傷つけるのは、キリストに對して罪を犯すことなの

です。それだから、食物が私のきょうだいをつまずかせらるなら、きょうだいをつまずかせないために、私は今後決して肉を口にしません。」

(第一コリント8章1〜4, 9〜13節)

「すべてのことが許されています。しかし、すべてのことが益になるわけではありません。すべてのことが許されています。しかし、すべてのことが人を造り上げるわけではありません。誰でも、自分の利益ではなく、他人の利益を求めなさい。：あなたがたが信仰のない人に招かれて、それに応じる場合、自分の前に出されるものは、いちいち良心に問うことなく何でも食べなさい。しかし、もし誰かが『これは、神殿に献げた肉です』と言うなら、そう知らせてくれた人のため、また良心のために、食べてはいけません。『良心』と私が言うのは、自分の良心ではなく、他人の良心のことです。どうして私の自由が、他人の良心によって左右されることがあるでしょうか。私が感謝して食事にあずかるなら、私が感謝しているものについて、どうして悪口を言われるわけがあるでしょうか。だから、食べるにも、飲むにも、何をするにも、すべて神の栄光を現すためにしなさい。ユダヤ人にも、ギリシア人にも、神の教会にも、つまずきを与えないようにしなさい。私が、何事につけ、すべての人を喜ばせているようにです。私は、人々が救われるために、自分の利益ではなく、多くの人の利益を求めているのです。」

(第一コリント10章23〜24, 27〜33節)

「あなたがたを迫害する者を祝福しなさい。祝福するのであって、呪ってはなりません。喜び、者と共に喜び、泣く者と共に泣きなさい。互いに思いを一つにし、高ぶらず、自分の低い人々と交わりなさい。自分を賢い者と思つてはなりません。誰にも悪をもって悪に報いることなく、すべての人の前で善を行うよう心がけなさい。できれば、せめてあなたがたは、すべての人と平和に過ごしなさい。愛する人たち、自分で復讐せず、神の怒りに任せなさい。『復讐は私のすること、私が報復する』と主は言われる』と書いてあります。『あなたの敵が飢えていたら食べさせ、渴いていたら飲ませよ。そうすれば、燃える炭火を彼の頭に積むことになる。』悪に負けることなく、善をもって悪に勝ちなさい。」

(ローマー2章14と21節)

他人からすでに恨まれている場合には、どうすべきでしょうか。私たちの親戚、友人、知人は、大きく三つに分けることができます。まずは差しさわりなく、仲の良い人。次に、あなたの視点から、加害者だと思う人。それから、あなたを加害者と思っている人。もし誰かがあなたに対して恨みを抱いているとすれば、それはたいがい親しい関係の人(例えば「親戚」、「友人」あるいは「元友人」、「同僚」)という可能性が高いです。彼らがあなたに対して抱いている思いは、思い違いや誤解によるものもあるかもしれませんが、あるいは実際にあなたが罪を犯したのかもしれない。

聖書はこのことについてこう語っています。

「だから、あなたが祭壇に供え物を献げようとし、きょうだいが自分に恨みを抱いていることをそこで思い出したなら、その供え物を祭壇の前に置き、まず行って、きょうだいと仲直りをし、それから帰って来て、供え物を献げなさい。」

(マタイ5章23〜24節)

現代の私たちは祭壇に供え物を持っていくことはしません、他のかたちで主の前に出ていくことがあります。最も明確なのは、聖餐式です。これは主を覚えて主の御前になる特別な時であり、第一コリント一章は、聖餐式を「ふさわしく」行うよう教えています。「ふさわしく」とは、心がきよめられている状態で主の前に出ることを意味します。つまり、すでに罪の赦しを受けており、真心から神を礼拝できる状態です。

マタイのこの箇所から三点わかります。

- ① 兄弟があなたに対して何かのわだかまりを覚えていてという自覚があります。
- ② あなたはその兄弟と和解する必要があります。
- ③ 和解するまでは、神に供え物（礼拝）をささげてはいけません。

それでは、どうやって和解すればよいのでしょうか。まず、その人のところへ行きましょう。問題が明らかであり、それがあなたの罪に起因するなら、神の前、またその人の前で告白し、赦しを求めてください。もし何が問題なのかかわからなければ、その人に聞いてみましょう。その人の訴えが正当な訴えであれば、神とその人に告白し、赦してもらおうようにお願いしましょう。もしそれが誤解や事実に基づかない噂であれば、真実を説明してください。

もし相手があなたにお金を貸していて、あなたが返していないということであれば、それが事実確認をした上で、もし事実であれば、全額に二割（五分の一）を上乗せして返済してください。

「主はモーセに告げられた。『人が違反して、主に對して背信の罪を犯した場合、すなわち、預かり物、抵当の品や盗品のことで同胞をだましたり、あるいは、同胞から横領したり、落として物を見つけても、それをごまかしたり、偽りの誓いをするなど、人が行えば違反となるすべてのことの一つに對して、その人が違反し、罪責ある者となった場合、盗品や横領品、担保の預り品や拾った物、偽り誓って手に入れたものを、すべてそのまま返さなければならぬ。償いのいけにえを献げる日に、その人はそれに五分の一を上乗せして渡さなければならぬ。』」

（レビ記6章1〜5節）

事実確認をした上で、事実ではなかった場合でも、もしそれでも相手があなたを訴え続けるのであれば、相手がどれくらい請求しているのかを聞き、その金額の二倍を渡しましょう。

「あなたを訴えて、下着を取ろうとする者には、上着をも与えなさい。」

（マタイ5章40節）

もし相手があなたの言動に対して罪でもないことに腹を立てている場合、謝ってはいけません。それは人間的な解決法であり、問題を根本的には解決しません。善悪の判断基準は相手の気持ちではありません。したがって、謝ることは嘘をつくことと同じになります。この場合、罪を犯しているのは相手です。あなたが罪を犯して人を傷つけたとすれば、それはあなたの罪。でも相手が、罪でもないあなたの言動に対して腹を立てているのであれば、それは相手の罪です。

もし誰かがあなたに対して恨みを抱いているなら、その人のもとに行きましょう。行かないという選択肢はありません。これはキリスト教の基本です。

「でも、彼は聞いてくれないうでしよう」

—— どうしてそう思いますか。

「私の態度が悪いので、彼は耳を閉ざしてしまうかもしれない。」

—— 行く前に、主の前で心を整えましょう。

では、逆の場合はどうでしょうか。誰かがあなたに罪を犯した場合はどうすれば良いのでしょうか。このことはマタイ8章で取り扱われています。「きょうだいがあるあなたに対して罪を犯したなら、行って二人だけのところでとがめなさい。言うことを聞き入れたら、きょうだいを得たことになる。」（マタイ8章15節）。

彼があなたに対して何かの思いを抱いているなら、あなたが行きなさい。あなたが彼に対して何かを抱いているなら、やはりあなたが行きなさい。いずれにしても、行くのはあなたの務めです。

和解を目的として行くのであり、責めるためではありません。責める心で彼のもとに行き、責める言葉を並べるなら、和解は不可能です。ですから、彼のために行ってください。何よりも彼と和解し、彼を正しい方向に導くことが目的なのですから。

マタイー8章の最後の節にはこう書かれています。「あなたがたもそれぞれ、心からきょうだいを赦さないなら、天の私の父もあなたがたに同じようになさるであろう。」（マタイー8章35節）。これは「七の七十倍」の直後に言われている言葉です。「七の七十倍」とは、彼が悔い改めた回数ではありません。いえ、あなたに対して罪を犯した回数なのです。それでも四百九十回、赦しの心をもって、彼のところに行きましよう。そのときには、彼が犯した罪のことを話さなければなりません。心にあるのは、あくまでも赦しの心。彼を悔い改めに導くのが目的です。喧嘩腰の態度で行けば、悔い改めに導けるはずありません。だから、彼のために行ってください。もし彼が罪を犯しているなら、彼は靈的に危険な状態にあります。

最近、ある人とこのような会話をしました。

私…「もしあなたが相手の立場で、同じことをしていたら、あなたはどうか感じると思いませんか。」

彼…「ひどくつらいと思います」

私..「そうでしょうね。ともすれば、彼もひどくつらいはずですね。それではもう一つ聞きましょう。あなたの場合、誰かから罪を犯されたときと、自分が罪を犯してしまったとき

と、どっちの方が気持ちが辛いですか。」

彼..「自分が罪を犯してしまったときです。」

私..「この兄弟はあなたに対して罪を犯しました。だからきつと彼は今も苦しい思いをしているはず。だから自分のためだけでなく、彼のために行ってあげなさい。」

赦す心で行くと、それはあなた自身のためにもなるのです。口先ではなく、心の中に赦しをもって彼のもとに行きましょう。心がない言葉を言うこともできません。しかし心に赦しがあるとすれば、それは自然と言葉にも現れます。

このようにして私が他の人と和解したとき、または他の人がこのようにして私のもとに来たとき、結果は大きく違いました。なんと、和解できたのです！

「平和の絆で結ばれて霊による一致を保つこと」（エペソ4章3節）は聖書の教えの基礎基本です。もちろん未信者とも和解することがあると思いますが、一番多いのはキリストの教会の中での和解です。同じ教会の中での話だけでなく、教会をまたぐ話かもしれません。心の態度が原因で分裂が起ることがありませんように。ある人は愛をもって他人の罪を指摘することを恐れ、また他の人は自分の非をへりくだって認めることをいともかもしれません。それでもこれはキリスト教の基礎基本なのです。もし相手があなたに対して何かを抱いているのだとすれば、彼のもとに行きましょう。和解することが何よりも大切です。

誰かがあなたに対して恨みを抱いていて、あなたができることをすべてしたのに、それでも彼が赦さないのであれば、他の誰かが彼と関わって助ける必要があります。あなたがそれ以上彼を助けようとする、かえって彼の恨みが増してしまうかもしれません。この際の注意点ですが、彼と関わる中であなたが苦くならないように注意してください。兄弟が罪を犯しているからといって、あなたまでも喜びを失うことがありますように。彼を愛し、彼のために祈り、彼が浴びせてくる非難は喜びをもって受け入れましょう。

「私のために、人々があなたがたを罵り、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いである。喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのである。」

(マタイ5章11-12節)

「あなたがたを迫害する者を祝福しなさい。祝福するのであって、呪ってはなりません。」

(ローマー2章14節)

「誰にも悪をもって悪に報いることなく、すべての人の前で善を行うよう心がけなさい。…『あなたの敵が飢えていたら食べさせ、渴いていたら飲ませよ。そうすれば、燃える炭火を彼の頭に積むことになる。』」

(ローマー2章17、20節)

もし恨みを抱いている者が救われていないのなら、彼には赦す力、恨みを捨て去る力がないのかもしれない。そうであれば、彼が必要としているのは、主イエス・キリストです。では、彼の救いのためにあなたができることは何でしょうか。

- 咎められる点のない正しい生活をおくること。
- あなたの愛が相手にはっきりと伝わるようにして愛を表現すること。
- 次のような聖書の命令に従うこと。

「愚かで無知な議論を避けなさい。それが争いの元であることは、あなたも知っているとおりにです。主の僕たる者は争わず、すべての人に優しくし、教えることができ、よく忍び、反対する者を柔和な心で教え導かねばなりません。もしかすると、神は彼らを悔い改めさせ、真理を認識させてくださるかもしれませんが。こうして彼らは、悪魔に捕らえられて意のままにされていても、目覚めてその罠から逃れることもあるでしょう。」

(第二テモテ2章23〜26節)

「そこで、私が、『主よ、あなたはどなたですか』と申しますと、主は言われました。『私は、あなたが迫害しているイエスである。起き上がれ。自分の足で立て。私があなかに現れたのは、あなたが私を見たこと、そして、これから私が示そうとすることについて、あなたを奉仕者、また証人にするためである。私は、あなたをこの民と異邦人の中から救い出し、彼らの

もとに遣わす。それは、彼らの目を開いて、闇から光に、サタンの支配から神に立ち帰らせ、こうして彼らが私への信仰によって、罪の赦しを得、聖なる者とされた人々と共に相續にあずかるようになるためである。』」

(使徒 26 章 15 ～ 18 節)

このようにして歩むなら、あなたはもはや彼が恨みを抱くような相手ではなくなり、むしろ彼の霊的な親になることでしよう。

第九章 両親との関係

ジム・ウイルソン

「あなたの父と母を敬いなさい。そうすればあなたは、あなたの神、主が与えてくださった土地で長く生きることが出来る。」

(出エジプト20章12節)

私がよく行う講演の中で、とりわけ好反応を受けてきたのは、「恨みから自由になること」と「親子関係の回復」です。この教えを実践した人は、若い人も年配の方々も多くの実を結んでいます。今、私はイリノイ大学のイリノイ・ストリート・レジデンスホールの学習室に座っています。先週、「アーバナ93」で、親子関係の回復にまつわるワークショップを行いました。参加した学生はわずか五十人ほどでした。ワークショップの内容がいかに衝撃だったのが、彼らの涙、疑問、発言、そしてワークショップ後の会話の中に表れていました。「この教えを実践したくないし、できるとも思わない」という思いの学生もいました。だからこそ、今こうしてエッセイとしてまとめることにしました。

まず、旧約聖書にある二つの箇所¹に注意を向けていただきたいと思えます。最初に少しだけ註解を添えてから、それからその聖書箇所を実生活に適用するための助言をしたいと思えます。

「あなたは自分のために彫像を造ってはならない。上は天にあるもの、下は地にあるもの、また地の下の水にあるものの、いかなる形も造ってはならない。それにひれ伏し、それに仕えてはならない。私は主、あなたの神、妬む神である。私を憎む者には、父の罪を子に、さらに、三代、四代までも問うが、私を愛し、その戒めを守る者には、幾千代にわたって慈しみを示す。」

(申命記5章8〜10節)

「あなたがたは、『なぜ、子は父の過ちを負わないのか』と言う。だが、その子は公正と正義を行い、私のすべての掟を守り行つた。彼は必ず生きる。罪を犯した者が死ぬ。子は父の過ちを負わず、父も子の過ちを負わない。正しき者の義はその人の上にあり、悪しき者の悪はその人の上に帰す。」

(エゼキエル18章19〜20節)

申命記5章9節にある「私を憎む者には、父の罪を子に、さらに、三代、四代までも問うが…」という言葉を読むと、不公平に思うかもしれません。しかしエゼキエル書18章では、子

どもが父の過ちを負わないとはつきりと教えられています。したがって、「父が犯した罪の責任が子どもに問われることはない」ということがはつきりと分かります。では、第二戒はどういう意味なのでしょう。簡単に言えば、罪は下流へと流れるのです。子どもは父に見倣って、同じ罪を犯します。そうやって私たちの先祖の罪の影響は、何世代にもわたって私たちにまで影響を及ぼします。これが「世代にわたる悪い知らせ」です。

しかし、この戒めは9節で終わりません。いえ、「私を愛し、その戒めを守る者には、幾千代にわたって慈しみを示す」と続いています。ここで言う「幾千代」というのは、文字通りの意味、「何千世代」という意味であって、「三代、四代」と対比されています。これは少し後の申命記7章9節でも教えられています。「あなたは、あなたの神、主こそ神であり、真実の神であることを知らなければなりません。この方は、ご自分を愛し、その戒めを守る者には、幾千代にわたって契約と慈しみを守る」（申命記7章9節）。つまり、不従順をとおして表される神への憎しみは、三代、四代にまで悪い影響を及ぼしますが、従順をとおして表される神への愛は、千代にわたる祝福をもたらします。

私は多くの人からこういう話を聞いて来ました。「私は自分を育てた親には絶対ならないと決めました。だから私はクリスチャンになって、クリスチャンと結婚して、正しく子どもを育てると決めました。それで実際にクリスチャンになって、クリスチャンと結婚をしました。でも、気がつけば、私は親と同じような間違いを犯していたのです。もしかして私は『世代にわたる悪い知らせ』の第二世代にいるのでしょうか。この流れが変わるのに、あと二世帯は待たないといけないのでしょうか。」

いいえ、待つ必要は全くありません。しかし、あなたが親との関係、また祖父母との関係を変えない限り、あと二世代は待たないといけないこととなります。ただあなたがクリスチャンになること、あるいは親に福音を伝えることだけでは、親子関係は変わりません。多くのクリスチャンは、実家にいるとき、親に対しては怒ってもいいと思っています。それで関係がどんどん悪くなっていくのです。

キリストが生まれる約四百年前、預言者マラキは呪いの言葉を含む条件付きの預言を語りました。旧約聖書の最後の二節です。

「大いなる恐るべき主の日が来る前に
私は預言者エリヤをあなたがたに遣わす。

彼は父の心を子らに

子らの心を父に向けさせる。

私が来て、この地を打ち

滅ぼし尽くすことがないように。」

(マラキ4章5〜6節)

天使ガブリエルは、ルカの福音書1章7節で、この預言を引用しています。

「彼は、エリヤの霊と力で主に先立って行き、父の心を子に向けさせ、逆らう者に正しい人の思いを抱かせ、整えられた民を主のために備える。」

(ルカ一章一七節)

呪いを回避するためには、心が両方向に向かなければなりません。私が使う比喻は、多くの場合、子どもに語りかけているように思われるかもしれませんが。しかし、実際のところ、私は子持ちの親に対して、自分の親との関係を思い直すように呼び掛けているのです。つまり、クリスチャンの親は両方向に心向かせなければなりません。まずは自分の親に心に向け、それから自分の子どもにも心向けるべきなのです。

次に、もう一か所を考えてみましょう。十戒の中で、世代について教えているもう一つの箇所は「第五戒」です。「あなたの神、主が命じられたとおりに、あなたの父と母を敬いなさい。そうすればあなたは、あなたの神、主が与えてくださった土地で長く生き、幸せになることができる。」(申命記五章一六節)。

それでは適用に移りましょう。この教えの適用は次の四点です。

- ① 神を愛すること(申命記五章九節)
- ② 神に従うこと(申命記五章九節)
- ③ 父と母を敬うこと(申命記五章一六節)
- ④ 父に心を向けること(マラキ四章五、六節)

私たちが十戒の教えに従って来なかったために、今は悪い知らせの第三世代、あるいは第四世代にあるかもしれません。それで私たちは地で長く生きることができないかもしれません（参照・エペソ6章1節）。私たちの地は呪いを受ける危険に瀕しています。この呪いを回避するために、マラキでは「悔い改め」、つまり「心の方向転換」が教えられています。

このエッセイで提案したいのは、どのようにして心から悔い改めることができるのかということです。この悔い改めの結ぶ実は計り知れません。① 呪いは終わり、② 長生きすることができ、③ 「三代、四代にわたる悪い知らせ」は「幾千代にわたる恵み」へと変わります。このエッセイの内容を適用する前に、大前提を確認しなければなりません。この大前提がなっていないところでは、エッセイの内容を実践しても、呪いの下から逃れて良い実を結ぶ保証はありません。

- ① クリスチャンになりました。キリストの内に入らないことには、神を愛することも、神に従うこともできません。
- ② クリスチャンと結婚しましょう。クリスチャンの夫婦関係のないところには、子どもが救いにあずかる保証はありません。
- ③ 結婚し続けましょう。「さらに、既婚者に命じます。妻は、夫と別れてはいけません。…また、夫は妻を離縁してはいけません。」（第一コリント7章10〜11節）。

この三つのないところでは、世代の方向転換は見込めません。ここの三つを押さえているところでもなお、悪い世代が続く可能性があるくらいですから。でもどうして悪い世代が続くのでしょうか。それは過去の世代の影響があなたにも、またあなたの子どもにも続いているからです。父と母を離れて、妻と結ばれたからと言って、それだけであなたの心が父に向いたとは限りません。しかし親に心向けなければ、悪い知らせは堰き止められません。自分の父に心向けなければ、良い夫にも、また良い父親にもなれると思っはなりません。

父に心を向けるにあたって、四つの要素が必要となります。親に対して福音を宣言することはその一つではありません。それは神が定めた権威を逆さまにすることになります。その代わり、父親に宛てて手紙を書くことをお勧めします。それぞれの要素を一つの段落にまとめるの良いでしょう。

第一段落：罪の告白

父や母に対するこれまでの反抗を神に告白しましょう。それから手紙の第一段落で、地上の父親にも罪を告白しましょう。その際、言い訳や親を責めるような含みのある言葉を含めてはいけません。

第二段落…親を敬うこと

いかに父親を敬っているかを言葉にして、一段落として父に伝えてあげましょう。もちろん父を尊敬していないとすれば、この段落はあなたの心では「偽善」と思われてしまうかもしれません。それでもどうしても書かなければならない段落です。それではどうやって書けばいいのでしょうか。

この段落を書くにあたって、まずは父を尊敬してこなかったことを神に告白しましょう。

「親父を尊敬するなんて、尊敬されるようなことを一つもしてこなかったのに！」——しかし聖書にあります。「父と母を敬いなさい。」ここには「尊敬できるような親は敬いなさい」という条件はありません。父を敬う根拠は、「あなたの父であるということ」。その理由だけで敬うべきなのです。父を尊敬するように命じられています。これは任意ではありません。父を尊敬していないとすれば、それはあなたの罪です。母親に対してもそう。でもどんな罪も、悔い改めれば、赦されるのです。

父を尊敬しなかったこと、あるいは失敬な態度を取ってきたことを自分の罪として告白し、赦されたことを確信したら、父を尊敬する決心をしましょう。でもここで思うかもしれませぬ。「どうして尊敬できるんだ！ 尊敬できるような人じゃないのに。」尊敬できる人なのかどうかは関係ありません。尊敬するかどうかは本人の決心次第です。神に従うことの表れとして、父を敬うことを決心できるのです。

そうやって私たちは真心からこの段落を書くことができます。自由な心をもって、先ほど決心したことの最初の実践として、父を尊敬していることを言葉にしましょう。

第三段落…親を愛すること

この段落では、父親を愛していることを伝えてあげましょう。もし父を愛していないとすれば、そこから変えなければなりません。「でも父は私を愛していなかったから、そんな父を愛することはできない」と答えるかもしれません。もちろん父親があなたを愛してこなかったことは非常に大きなことです。父親に愛されていたら、自然と父を愛せることでしょう。でも幼少期に戻って、人生をやり直すことはできません。また幼少期に戻って、父に子育てをやり直す機会が与えられたとしても、あなたの父親が変わるとも限りません。この問題は、今いるところから考えなければなりません。神は「理想の場所」からではなく、「今立っている場所」から私たちを導いてくださるお方です。あなたは今大人ですし、クリスチャンですから、無限の愛と赦しがあなたの手の届くところにあるのです。この無限の蓄えはすべてのクリスチャンのために備えられているのです。もしかしてクリスチャンであるあなたは父を愛してこなかったことを神に告白しなければならいかもしれません。というのも、父を愛さないことは神の命令に相反する言動であり、罪なのです。私たちは隣人、兄弟、敵を愛するように教えられています。あなたの父親は絶対、この三つのうちのどれか一つには該当します。

父を愛してこなかったことを告白し、赦しをいただいてから、父を愛する決心をしましょう。その最初の実践として、この段落をとおして父に愛を表現しましょう。

第四段落…親に感謝すること

次の段落では、父に対する感謝を表現しましょう。もし父親に感謝できないとすれば、それは尊敬や愛同様に、父親の問題ではなく、あなた自身の問題です。また解決策も一緒です。感謝できないことを御父に告白しましょう。そうして赦しをいただいてから、父に対して感謝を表現しましょう。

ここまでの四要素は不可欠です。また他にも二点ほど、手紙に付け加えても良い内容がありますが、こちらは任意で。

第五段落…親の経験談を求めること

「いつか時間を取って、父の昔話、人生の経験談を聞かせてください」と添えるのは良いことでしょう。あるいは手紙として書いて送ってもらうのも良いかもしれません。そうお願いしても、父は応じてくれないかもしれません、でも関心を持ってくれているということを知ると喜ぶに違いありません。

第六段落…親の助言を求めること

一般的なこと、具体的なことについて、父の助言を求めましょう。これも一つ親を敬うこととなります。

同じような手紙を母にも書いて送りました。父に送る手紙では、第二段落が「敬うこと」と、第三段落が「愛すること」でしたが、母に送る手紙では、この順番を逆にしてください。まず愛していることを伝え、それから尊敬していることを伝えてあげましょう。男性も女性も、愛されることと尊敬されることが必要です。女性は尊敬よりも愛を、男性は愛よりも尊敬を必要としています。しかしどちらも必要です。愛されるにふさわしいこと、あるいは尊敬されるにふさわしいことをする以前から、子どもは親を愛し、尊敬するべきです。

この手紙を送ってから、少しずつでも良いので、個人的なお手紙、ハグ、場に応じたスキンシップを取るようにしましょう。

この手紙に、なぜ手紙をおくるにいたったのかという理由を添えても構いませんが、注意点として、説明には言い訳や責める言葉は一切使わないようにしましょう。一例として、こんな感じの説明を添えたらどうでしょうか。「お父さんへ、お父さんが私のことを愛していることは知っています。愛情表現が苦手だということも分かります。だから私は育っていた中で、いつからか、お父さんからは愛されていないと思うようになってしまいました。今も愛されているということは信じるしかありません。私は中学校から大学まで、男癖が悪かったのは、男性から愛されなかったからです。もちろん、どんなに頑張っても、求めていたものは得られませんでした。私は何度も騙されていました。数か月前にお父さんにお手紙をおくり、それからもっと実家に行くようになりました。会うたびにハグをするようになった娘を見て、お父さんはびっくりしているかもしれません。私はもう結婚していて、子どももいますが、それでもお父さんが必要で、お父さんも私が必要です。だから帰るときにはお父さんにハグをするんで

す。お父さんに愛されたいから、愛しています。」このような文章を、自分の状況にあわせて書き換えてください。

両親がこの二通の手紙を受け取った後で、いくつかのことが起こるはずですが、まず手紙は捨てられることはなく、何度も読まれるでしょう。それから何らかの形で良い反応が返ってくるはずですが、もし反応がなかったとしても、自分が何か間違ったことをしたとは思わないでください。忍耐強く、与え続けましょう。文化によっては（例えば北ヨーロッパの文化など）、感情を表に出すことがあまりありません。感情をあらわにするのは怒る時だけ、ということさえあります。ですから、あなたのこうした愛情表現は、ご両親にとって気恥ずかしいところがあるかもしれませんが、しかし、たとえどう表現すればよいか分からなくても、両親は本心ではこうした愛情表現を受け取りたいと思っています。

ある五十年代後半の男性がこのような手紙を父親に書きました。すると母親から返事が来ました。「私はあなたのお父さんと六十年間結婚してきましたが、あなたの手紙を読んだとき、結婚して以来初めて、お父さんが涙を流すのを見ました。」

1980年代初めのころ、私たちはアイダホ大学のデルタ・ハウスで、「キリスト教の実践」と題して夏期講座を開催しました。参加者はおよそ四十人で、「親を敬うこと」もその中の一つのテーマでした。その翌秋、ワシントン州立大学でひらかれた昼の聖書クラスでも同じテーマを教えていたとき、ある学生が手を挙げて、次のような話をしてくれました。

「この内容を、デルタ・ハウスでの夏期講座で学びました。私が十六歳のとき、父は私を家から勘当し、『もう二度と顔を合わせない』と言いました。それで家を出ました。その後、私はクリスチャンになり、クリスチャンの女性と結婚しました。現在はワシントン州立大学で経済学の大学院生をしています。十六歳の時以来、父とは一度も会っていませんでした。両親は離婚寸前で、家庭内別居をしていたと聞いています。」

「このことを学んだ後、私は父と母にそれぞれ手紙を書きました。一通書くのに何日もかかり、それで郵送も数日ずれました。ところが不思議なことに、両方の手紙が同じ日に両親の元に届いたのです。手紙が別々に宛てられていたので、母は自分の手紙を持って自室に、父も自分の手紙を持って自室に入りました。二人とも読み終えた後、それぞれの手紙を交換し、また別々の部屋で読み直しました。そして部屋から出てきたとき、父は目に涙を浮かべて『ポールマンに行って息子に会ってくる』と言いました。それ以来、私は父と再会することができませんでした、両親の結婚も救われました。」

問題は二つあります。心の問題と行動の問題です。まず心の問題が先です。あなたの「愛のなさ」、「尊敬のなさ」、「感謝のなさ」をまず初めに解決しなければなりません。それは神に対して自分が犯してきた罪として告白しなければなりません。神からの赦しを受けないままにこの手紙を書くことは、すなわち嘘と偽善の手紙を書いておくことになります。

あなたの父親が先にあなたの方に心を向けてくれる日を待つこともできませんが、そうすれば長いこと待たなければならぬでしょう。そんな時間の余裕はありません。だからあなたが先に心を父に向けなければならぬのです。

自分の心が清められたら、手紙を書いてください。その後も手紙を書いたり、電話をかけた
り、訪問したりして、尊敬、愛、感謝を表現し続けてください。

これらのことを実践することをおして、あなた自身が変えられます。あなたは「よりよい夫、息子、父親」、あるいは、「よりよい妻、娘、母親」になるでしょう。あなたの愛と従順は、千代にわたる愛をもたらすことになるのです。

第十章 満腹するほどの愛

ジム・ウイルソン

「与えなさい。そうすれば、自分にも与えられる。人々は升に詰め込み、揺すり、溢れるほどよく量って、懐に入れてくれる。あなたがたは、自分の量る秤で量り返されるからである。」

(ルカ6章38節)

神は私たちに「愛するように」と命じておられます。愛というものは妻にはじまり、兄弟に、隣人に、見知らぬ人に、敵にまでも実践すべきことです。この愛とはイエス・キリストが十字架に架かったときに私たちに注いでくださった「神の愛」です。つまり「犠牲的な愛」であり、「与える愛」なのです。また愛を受け取った者に変化をもたらすような愛です。私たちを救ったのは、この愛なのですから。

愛には愛すべき対象がなければ、愛することはできません。また愛は表現しなければ、蓄えるだけでは意味がありません。「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。」(ヨハネ3章16節)。神が愛されたのは「世」であり、その愛は「賜ること」をとおして実践されました。この愛は中途半端な愛、抵抗しつとも与えた愛、結果に表れるとも限らないような愛ではありませんでした。この世の罪人を救い、その罪を完全に赦すほどの効力が

ありました。「罪の増し加わったところには、恵みもますます満ちあふれた。」（ローマ5章20節）。

愛するようにと戒めている御言葉に従おうとする私たちは、何よりもまず「神の愛」を模範としなければなりません。神の愛は無条件で、とめどなく注がれます。愛について言えば、神は儉約家ではありません。愛を必要としている人には、その人が必要な愛に増し加えて、溢れんばかりに愛を注ぐべきです。そんなことは無理な要求と思うでしょうか。あまりにも愛に飢えているので、まるでネズミの穴に水を注ぐような徒労に思えるかもしれません。愛に飢えているあの人を愛しようとしているうちに、自分が渴いてしまう。それはそうかもしれません。もし相手から報われることを期待して、自分の親切に相応するくらいの愛を相手に求めているとすれば、すぐに渴いてしまいます。しかし、人に愛情を注ぐその度に、聖霊から新しく満たされているとすれば、渴くことはありません。

この原則を子育てにあてはめて考えましょう。子育てをする上で、聖書的な原則を理解し、実践しなければならぬような領域がいくつもあります。例えば、次のような問題が考えられます。

- ・ 子どもが従ってくれない。
- ・ 子どもをしつけていない（あるいはしつけの効果薄い）。
- ・ 子どもをよく訓練し、教えていない。
- ・ 兄弟同士の競り合いや妬みがある。

- ・ 親に見てもらうためにぐずること、泣くこと、癩癩（かんしゃく）をおこすことがある。
- ・ さまざまな不安の表れが見られる。（例えば、大声で話すこと、イボ、肥満。人を叩くこと、かじること。よく体を搔くこと、体をいじること、その他の不自然な手のしぐさ。）

どれも一文にまとめきれないような内容です。それぞれを扱っている良書が出回っていますので、皆さんも読んだことがあるかもしれません。しかし、中には、読んだとおりに実践しても、求めている結果が得られていないような親もいると思います。それなら本に書いてあることが間違っていたのでしょうか。そう考えがちでしょう。しかし、本の内容が正しくて、本の内容をそのまま実践したことも間違いないのに、結果が伴わないことがあります。それでは、どこでつまづいてしまっているのでしょうか。

ここで先ほど述べた原則を思い出す必要があります。私はこの原則を「満腹するほどの愛」と呼んでいます。「満腹の愛」は、「十分な愛」、「楽しい時間を過ごすこと」、「たくさん時間を一緒に過ごすこと」と区別しています。もちろん子どもとたくさん時間を過ごすことも、質の良い時間を過ごすことも大切です。二つを前提として、その上で、全集中で子どもに関心を向けることが大切です。腹八分で過不足ない愛は「十分な愛」かもしれません。でも「満腹の愛」はその先を行く愛です。いわば愛の容量を最大限に満たしている愛、体の隅々まで行きわたった愛なのです。

水に砂糖を溶かしていくと、あるところから、砂糖が溶けてくれなくなる時点で達します。その状態を「飽和」と言います。そこからは、砂糖を入れても、水に溶けることなく、底に溜まっていきます。愛も同じです。もう愛を注いでも、受け取ってもらえない状態まで愛を注ぐことができず。その先、愛が拒まれるわけはありませんが、満腹しているの、必要ではなくなりません。

私は伝道師として様々な場所で講演してきましたが、そこで会衆に何度も尋ねたことがあります。親から愛されてきたと思う人に挙手をお願いします。すると九割以上の人が手を挙げます。全員ではありませんが、ほとんどです。それから手を挙げている人に尋ねます。「十分に愛されてきたと感じますか。」ここで半分ほどの手が下がります。三つ目の質問は「十分に愛されてきたと思う人も含めて、もっと親に愛されたかと思う人はいますか。」この質問には、必ず全員が挙手します。

愛のない家庭。

愛が少しあった家庭。

愛が十分だった家庭。

それでももっと愛されたい。

親からの愛が足りたと思った人はいませんでした。それでは彼らの子どもに同じ質問をしたとしましょう。子どもたちも同じ答えを返すはずで。

愛が足りていない結果がどこに現れるのか。子どもの従順さは、おおよそ親の愛と比例します。（もちろん罪の性質が原動力ですから、救われない限り、愛されるだけで神に従うことはできません。しかし救われる前も、その後も、不従順は愛の不足と直結しています。）子どもをしつけを考えましょう。従わなかったことをしつけることは正しいことです。しかし、子どもを正しくしつけているだけで、愛が不足しているとすれば、思うような効果は得られません。子どもたちは予想外なことを学んでしまうこともあります。「親が自分の方を見てくれるのは悪いことをしたときだった。」そう覚えてしまって、子どもが尚のこと悪いことをし始めることだってあります。欲しいのは親の関心なので、悪いことをすれば親が見てくれるのであれば、しつけられてもいいのです。したがって、愛情が不足しているのであれば、どんなにしつけても従ってもらえないのです。

兄弟同士の競り合い、自己中心、妬みなども同じです。子どもに注ぐ愛と逆比例関係にあります。子どもが全員、満腹するほどの愛を受けているときには、兄弟同士の競り合いや喧嘩もほとんどありません。愛が増える分だけ、子どものぐずり、反抗、妬み、癩癩などは減ってきます。また愛に比例して、子どもの信仰は成長していきます。

「それとも、神の慈愛があなたを悔改めに導くことも知らないで、その慈愛と忍耐と寛容との富を軽んじるのか。」（ローマ2章4節）。罪人の私たちを悔い改めに導くのは、神の愛なのです。神は慈愛と忍耐と寛容を豊かに注ぐことを通して、私たちの信仰を成長させてくださ

っています。私たちの天の父がそうだとすれば、尚のこと私たちも同じようにして子どもを育てるべきでしょう。

私たちのわだかまりはどこにあるのでしょうか。「ぐずぐずしている子どもは鼻につく。」「そんな子どもを抱きしめたり、一緒に過ごしたりはしたくない。」「悪いことをしたばかりなのに、そんな子どもを抱いてあげるのは、悪いことを助長することにならないだろうか。」「どれも間違っているとは言いません。でも子どもを愛することは、子どもの悪い行いを、良いこととして認めてあげることではありませんので、混同してはいけません。いや、「悪いことをしたいと思う子ども」を癒してあげているのです。子どもを愛しているのは、その子の必要を満たすためであって、子どもの強要に応じているわけではありません。

子どもが受け取っている愛について言えば、「子どもの主観」は「親の主観」よりも正確な指標です。親は愛情を注いでいるつもりでも、子どもからすれば、愛として受け取れないような形の愛もあります。

ぐずっている子どもは、親の愛情と関心を求めています。幼児だと分かりやすいですね。何も問題はないかもしれない。お腹が空いたわけでもない。おむつが汚れているわけでもない。風邪をひいたわけでもない。ただ親に抱っこされたい。これが幼児だとすぐに抱いてあげるのが、ですが。

しかし子どもが二歳になって、三歳になって、九歳になって、十歳になっていくと、ぐずりはじめる子どもに対して、愛を流るようになってきます。「その子に必要なのは愛じゃなくて、鞭だ。」と思うでしょうが、信じてください。子どもが愛を要求しているのなら、愛を必

要としています。愛に満腹すれば、満足して、愛を求めなくなります。（逆に、愛を必要としているのに、愛を求めない子どももいます。同じだけ親の愛と関心が必要なのに、声をあげて要求する子どもより与えられない。要求してこないのに、子どもが満たされていると親は勘違いしてしまうのですが、後から愛の不足が行動に現れるようになってくる場合があります。）

子どもが満腹する前に、子どもを愛する余裕がなくなってしまうときがあります。あるいは、「子どもにどんなに愛を注いだとしても満足することはない」と思って、早々に愛することを辞めてしまうことがあります。親が子どもに関心を向けて、愛することを続けていれば、子どもはそのうち満足します。そうすれば不安になることも少なくなり、成長する過程で愛を強要するような行動が珍しくなります。子どもが安心していること、親を信頼していることが、親への従順の基盤となるのです。

これも昔の話になりますが、ある知り合いがいました。彼の息子は、左腕にイボができてしまった、それも十八個くらいありました。イボができたままで、何か月経ってもなくなりませんでした。ある日、お父さんが言いました。「ジョニー君、神様にイボを癒してもらうために一緒に祈らない？」子どもは答えました。「いやだ。イボは僕の友達なんだ。一緒に遊ぶんだ。」でもお父さんは知っていました。このイボは子どもの不安の現れでした。不安になってるのは父親である自分が十分に子どもを愛して来なかったからです。それでお父さんは決心して、子どもとの特別な時間をつくって、一緒に過ごすようにしました。イボは一か月もしないうちになくなりました。

もう一人の知り合いには息子が四人いました。四人とも年子で、上は四歳、下は一歳でした。ある日、両親が私のところを訪れました。長男のことで相談があったのですが、どうしても解決できない問題が二つありました。

・ 一日中、弟たちを殴ってしまう。（その度に、親は声を厳しくして息子を叱るか、お尻を叩くか、あるいは両方をして、息子をしつけていました。）

・ 顔の皮膚を引っ掻いて、いじってしまうもので、顔に赤いカサブタがたくさんできてしまった。（まるで水疱瘡かと思ってしまうほどでした。）

どんなにしつけても、どんなにお尻を叩いても、息子は学習しませんでした。親は途方に暮れていました。私は少し悩んでから、このように助言しました。親は途方に暮

「長男坊が弟を殴るようなことがあったら、今度は息子にハグしてあげて。」

お母さんは答えました。「弟を殴っているのに、息子をハグしたらもつと殴るようにならないかな・・・。」

「大丈夫。息子はもう自分がやっていることが悪いというのは十分知っている。だから弟を殴ってしまうときだけではなく、一日中長男をハグしてほしいんだ。次男が生まれたときから息子は愛が足りていないのに、今は三人目も四人目もいる。親が注目してくれるのは悪いことをしているときだけだから、悪いことをしてしまう。不安だから顔を掻いてしまうんだ。だか

らクドイと思ってしまうほどに息子を愛してほしい。そうしたら肌も治るし、二週間もしないうちに弟を殴らなくなるよ。」

彼女は答えました。「そんなことは私にできないと思う。」

「どうして?」

「もう息子が嫌いになってしまった。」

両親は自分の罪を自覚し、罪を告白し、愛を実践しました。そうしたら二週間も経たないうちに顔がきれいになり、親の言葉に従うようにもなりました。

とても活発な十二歳の息子をもつ父親が、相談にのってほしいと言って私のところに来ました。息子は些細なことでも注意をうけて育っていました。それでも学習しない子どもでした。また息子は同じ年頃の子どもの友達付き合いに苦労していました。

親は息子を愛していましたし、愛情表現が極端に不足していたわけでもありませんでした。それでも、子どもに注意しても、しつめても、お尻を叩いても、子どもは聴く耳を持ちませんでした。私は父親に助言しました。愛はいくら注いでも注ぎすぎることはない。途方に暮れていた父親は、私の助言を実践しました。機会あるごとに息子とスキンシップをとり、極力些細なことでは注意しないように心がけました。それから息子と一緒にクリスチャン男性のための聖会に出席してみました。教会が出してくれた車の後ろで、片道二時間かかる会場までの往復、息子を膝にのせました。聖会中も息子を膝にのせたり、腕を肩にかけたりしました。それで帰ってきたら、お母さんはビックリしました。息子の態度が変わっていて、注意することがあつ

ても、前ほどはスネたりしなくなつたのです。また他の子どもとの友達付き合いも次第に改善されていきました。

若い人と関わって、さまざまな相談を聴いている中で浮き彫りになつたことがありました。「お父さんは一度も自分の非を認めたことがない。お父さんが間違っていることは、お母さんも、子どもも、神様も知っているのに、お父さんだけは認めない。お父さん自身も間違っていると分かっているのに、かたくなに認めない。」

この本を読んでいるお父様方の中にも同じような人がいるかもしれません。子どもはもう成人して巣立つたけれど。しかし子どもが幼かったときに、子どもには満腹するほどの愛を注いで来なかつた。その結果として、子どもは様々な問題に見舞われた。また中には、子どもはまだ巣立つてはいないけれど、十代になって可愛くはなくなつた子どももいるかもしれません。

今さら何ができるのでしょうか。まずは自分の罪、過ち、至らなさを神に告白しましょう。叱りすぎ、嫌がらせ、侮辱、無視、叫び、怒り、えこひいき、また十分に愛情を表現しなかつたこと。自覚あることを一つ一つ告白しましょう。神の前で告白したら、今度は神に告白したことを手紙にして、子ども一人一人に送ってあげましょう。「自分の行動と態度を罪として神に告白しました」、と伝えましょう。もし具体的な罪があったら、そのことを子どもにも告白しましょう。「自分がしたことで、まだ痛んでいるようなことがあつたら教えてください」、と添えてあげることも良いでしょう。自分自身も両親のことで痛んでいるところがあるでしょうから。子どもが教えてくれるときには、自分を守ろうとする必要はありません。ただ聞いてあ

げて、神のみこころに適った悲しみを神にお捧げしましょう。「神のみこころに添うた悲しみは、悔いのない救を得させる悔改めに導き、この世の悲しみは死をきたらせる。」（第二コリント7章10節）。それから愛を、子どもたちに豊かに注いであげましょう。

もし子どもたちがまだ一緒に住んでいるとすれば、同じようにしましょう。手紙とあわせて、言葉でも伝えてあげるべきですが、それでも手紙にまとめることが大切です。言葉だけで済ませず、手紙を渡してあげることが大切なのは、いくつか理由があります。一、中断されずに最後まで話すことができるから。二、手紙は何度も読み返すことができるから。三、手紙は取っておくことができるから。だから言葉で伝えた上で、手紙も渡してあげましょう。

子どもは男の子でも、女の子でも、両性の両親からの愛を必要としています。ひとり親家庭でも、子どもは二人の親からの愛を必要としています。そうすると、子ども一人一人が満腹するほどの愛を与えることがとても大変になります。一人で二人分の愛情を注がなければなりませんから。ここで、よくある逃げ道なのですが、子どもの愛と忠誠心を求めて、前の夫や妻の悪口を言ってみたり、あるいはお金で子どもの気を買おうとしたりすれば、本末転倒です。子どもに愛を注ぎたいという動機そのものは良いのですが、結果として子どもに注いでいるのは、愛ではなくなってしまうのです。

子どもに愛情を表現する一番良い方法は「夫婦喧嘩をしないこと」です。夫婦喧嘩ほどに子どもを不安にさせてしまうものはありません。夫婦で意見が一致しないことはもちろんありますが、そのときには子どもが見えないところ、聞こえないところで話し合うべきです。もう何年も子どもの前で夫婦喧嘩をしたり、仲違いしたりする習慣がついてしまっている場合には、

まずは神の前で告白しましょう。それから妻に告白し、子どもに告白しましょう。それから夫
婦喧嘩を終わりにしましょう。

第十一章 女性の安心

ジム・ウイルソン

「与えなさい。そうすれば、自分にも与えられる。人々は升に詰め込み、揺すり、溢れるほどよく量って、懐に入れてくれる。あなたがたは、自分の量る秤で量り返されるからである。」

(ルカ6章38節)

女性は、愛され、守られ、養われ、安心を得るために神によって造られました。しかし、女性が「愛されていない」、「守られていない」、「安心できない」と感じる理由はいくつかあります。安心というものは、客観的な事実と主観的な感情が組み合わさったものです。人間関係(親、夫、子ども、など)や衣食住を失った女性がいたとしましょう。この女性は、不安を感じる客観的な理由がありますが、主観的には不安を感じない場合もあります。同時に、客観的に言えば不安要素がなくても、それでも不安を感じ、その不安を埋め合わせてくれるものを想像してしまうこともあります。

たとえば、ある女性が強い不安を感じているとします。その不安があまりにも強いため、彼女はそれを「事実」だと確信してしまいます。彼女の最大の願いは、心の虚しさを埋め合わせることです。そして、男性さえいれば、心が満たされると思い込みます。それは部分的には正

しいかもしれません。しかし、彼女の心の虚しさがあまりにも大きいため、男性がいたとしても、満たされません。なぜなら、その男性もまた心が虚しくて、自分の虚しさを満たしてくれる女性を探しているからです。二人とも不安で、心の虚しい人なわけですから、二人が結婚してもうまくいくはずありません。虚しさが倍に増えるだけなのです。

そうやって結婚した女性は、なおのこと不安になるでしょう。そこでその彼女は、「子どもが生まれてくれれば満たされる」と考えます。これもまた一部は真実です。女性は子どもを産むために造られました。しかし、赤ん坊は必要だらけで、要求の多い存在です。しかも複数の子どもがいる場合、彼女はその要求に応えきれず、一つ一つ対応できなくなってしまう。こうして彼女は不安で疲れ果ててしまいます。そこで今度は、「もっと良い家に住んで、もっと良い家具があれば安心できる」と考えます。しかしそれは今の給料ではできませんから、共働きの生活が始まります。

その連鎖のあげくに、彼女は疲れ果ててしまいますが、心の不安はそのままで、彼女の力は消耗しきっています。今度彼女が向かう先は、衣服や音楽、パーティー、あるいは別の男性。夫はロマンチックではありませんからね。夫は夫で、自分の必要が満たされていませんでしたから、結婚して数年も経たないうちに諦めてしまいました。

これは、私が知っている多くの女性たちの姿です。中には何度も結婚し、その他の男性とも関係を持った人もいます。または財産に執着している人もいます。彼女たちはようやく気づき始めています。男性、子ども、家、財産、娯楽では、自分の心の虚しさを埋めたり、求めている安心を得たりすることはできないのです。

この虚しさは確かに満たされなければなりません。でも、「どうしても心が満たされなければならぬ」と強く求める自己中心的な姿勢がある限り、たとえ男性や子ども、家や財産を手に入れたとしても、決して満たされることはありません。この自己中心性をまず捨てなければなりません。その思いはまるで小さくまるめた拳のよう。心の中のわだかまりなのです。この自己中心的な握り拳は、人の心をしばませ、内側から破壊してしまいます。

神の御前で、この自己中心的な心を悔い改めなければなりません。すなわち、それを罪として認め、その罪を捨て去る決心をしなければなりません。そうすれば、神は彼女に素晴らしい喜びと平安、自由を与えてくださいます。そうすれば、キリストにあつて、心から安心できるのです。

この世における安心は、まずは父、母、兄弟姉妹、親戚たちとの親しい関係から来ます。次に、「愛」と「与える心」に満ちたキリストにある兄弟姉妹たちから与えられます。また、彼女自身が「愛」と「与える心」のある人となり、たとえ相手から愛が返ってこなくても、それでもあらゆる人に愛をもって接することができれば、そこから安心が来るでしょう。もちろん夫から安心を与えられることもあります。それは今の夫であつて、「未来の夫」には安心を与える力はありません。というのも、安心を得るために結婚すべきではないからです。むしろ、結婚する前に安心しているべきなのです。そうすれば、結婚生活が始まった後で幻滅したり、傷ついたりすることはありません。

では、女性はどうすれば安心を得られるのでしょうか。

第一歩は、自分の行動だけでなく、態度そのものを告白することです。そして、神の恵みによって、父、母、兄弟姉妹を愛する決心をしなければなりません。その愛は、条件つきであってはなりません。「もし彼が〇〇してくれたら愛する」といった「もし」は禁物です。この愛の表現の仕方として、例えば親切な言葉やハグ、与えることや助けることが含まれます。そしてその愛をより多くの人へと広げていくのです。「キリストの愛が私たちを取り囲んでいるのです。私たちはこう考えます。ひとりの方がすべての人のために死んでくださったのなら、すべての人が死んだことになりました。そしてキリストは、すべての人のために死なれたのです。それは、生きている人たちが、もはや自分のためではなく、彼らのために死んで復活された方のために生きるためです」（第二コリント5章14〜15節）。そうしている中で、女性はなおなお心が満たされていくのです。

女性が目指すべき長期的な目標は、聖い人、愛にあふれた人、親切な人、喜びに満ちた人となることです。そして、愛に溢れた家庭をつくり、愛に溢れた子どもや孫を育てることも望むべきことです。この働きをとおして、神から「よくやった。良い忠実な僕だ。主人の祝宴に入りなさい。」（マタイ25章23節）と言われることを待ち望むべきです。

この解決策は、女性がすでにクリスチャンであることを前提としています。つまり、信仰によってイエス・キリストを主、また救い主として受け入れたということです。彼女は死から命へと移されたのです。これこそが、男性にも女性にも共通する、安心の始まりなのです。

第十二章 責任感のある男性となるために

ジム・ウイルソン

大人の男性（信者、未信者を問わない）に最も欠けている資質が一つあるとすれば、それは「誠実さ」です。この言葉には、正直さ、道徳的健全さ、純潔、高潔さ、そして責任を引き受ける意志が含まれます。このエッセイでは特に最後の側面、つまり「責任を快く引き受けること」について取り上げたいと思います。

責任感とは、私心なき男の特徴です。逆に、無責任は利己的な人間の特徴です。誰かがキリストを受け入れたなら、その人が次第に責任感を持つようになることを当然のこととして弁えなければなりません。

神は王、政治家、上司、夫、父にそれぞれ責任をお与えになりました。そして、私たちが責任ある行動を取っているかどうかにかかわらず、神は私たちに責任を問われます。もし今の時点で、先ほどあげたような責任ある立場に就いていないとすれば、それでも責任に向かっているわけですから、今のうちから責任を意識して訓練すべきです。私たちは責任を担う者となるための訓練を受けているのです。責任は男らしさの一角なのです。

私たちは「男らしさ」について世的な考えを持ってしまいがちです。つまり、テストステロンやその結果（喧嘩、飲酒、フットボール、狩猟、軍隊、性的能力、権威など）によって男らしさ

が決まるという考えです。しかし、こうした特徴に重点を置くことは、かえって本来の男らしさの証である「責任を受け入れること」の妨げになることがあります。

創世記3章12節でアダムが言った言葉は無責任でした。「あなたが私と共にいるようにと与えてくださった妻、その妻が木から取ってくれたので私は食べたのです。」アダムは神と女のせいになりました。神はアダムにこう言われました。「あなたは妻の声に聞き従い、取って食べてはいけなないと命じておいた木から食べた。あなたのゆえに、土は呪われてしまった。あなたは生涯にわたり、苦しんで食べ物を得ることになる。」(創世記3章17節)。

それ以来、アダムから生まれた男たちは誰彼構わず、妻や子ども、上司や部下に責任をなすりつけてきました。

アブラムも無責任でした。「エジプトに近づいたとき、アブラムは妻のサライに言った。『あなたが美しい女だということを私はよく知っている。エジプト人があなたを見れば、「この女はあの男の妻だ」と言って、私を殺し、あなただけを生かしておくだろう。だからあなたは、自分のことを私の妹だと言ってほしいのだ。そうすれば、あなたのお陰で私は手厚くもてなされ、命は助かるだろう。』」(創世記12章13節)。アブラムは妻サライのことで、自分の命が狙われるということを見越していました。それでサライには嘘をつかせ、妻ではなく、妹だと言わせました。ファラオはサライを連れて行き、アブラムを裕福にしました。神は人妻をめとろうとしていたファラオとその家を病に降らせました。ファラオは真相を知り、サライを返し、アブラムを追放しました。

それから二十年ほど経った後、アブラムの名前は今や「アブラハム」となっていました。そんなアブラハムはゲラルの王アビメレクに対して同じことをしました。今度はサライに嘘をつかせるのではなく、自分で嘘をつきました。アビメレクもサライを連れて行きましたが、神は夢の中でアビメレクに現れて警告し、サライを守られました。アビメレクはサライに触れていませんでした。この話は創世記20章で読むことができます。

この無責任さは息子イサクにも引き継がれました。アビメレクに対して、妻リベカのことでも嘘をつきました（創世記26章）。不信者であるアビメレクの方が、アブラハムやイサクよりも道徳的な良心を持っていたようです。サラもリベカも無罪で弱い存在なのに、守っていませんでした。

無責任は特殊な罪です。言わば、他人に責任を押しつける罪なのです。それは嘘のようなもので、自己防衛の手段であり、極端な利己心です。例えば、育児放棄の男。養育費を支払わない男。他人を非難する男。妻に暴力を振るう男。暴言を吐く男。家族を養わない男。家族を愛し、守らない男。これらすべては無責任の現れです。

一方で、聖書には責任ある男性たちが登場します。例えばヨハネ4章の役人、使徒10章のコルネリオ、使徒16章のピリピの看守、そして第一コリント9章と第二コリント8章のパウロです。

この責任については、民数記30章でさらに教えられています。この章で教えられているのは、家の中にいる妻や娘に対する父親の責任です。

「権威」と「責任」は切り離せません。この二つを切り離せば周りの人に大きな害をもたらします。

子どもたちを考えてみましょう。中には、「自分がリーダーになりたい」と言う子ども、「ボスになりたい」と言う子どもがいます。でもいざ問題が起こると、どこを探してもその子どもは見つかりません。見つかったも、他の子どものせいになります。つまり、権威は欲しいけれど、権威に伴う責任は引き受けたがりません。

歴史の中では様々な王がいましたし、最近のアメリカの大統領を見ても、この差が見えます。大統領となる人は、ある意味で、この世の中で一番の権威が与えられていることになりました。

トルーマン大統領は、大統領の権威を使いましたが、同時に自分の行いについてはことごとく責任を取りました。トルーマン大統領の机には、「責任は私が取る」と書かれた卓上サインが置かれていました。責任転嫁をしませんでした。一方で、クリントン大統領やオバマ大統領は権威を行使しながらも、責任から逃れ、嘘をつき、他人を非難することをためらいませんでした。誠実さに関して言えば、彼らは責任のある夫、父、政治家、大統領ではありませんでした。

・男としてどんな権威（例えば「夫としての権威」、「父としての権威」、「牧師としての権威」、「会社における権威」）が与えられていようと、それでも彼は権威の下にいる人です。上にいる神に従わなければなりません。

・夫としての責任。「夫たちよ、キリストが教会を愛し、教会のためにご自分をお与えになったように、妻を愛しなさい。キリストがそうなされたのは、言葉と共に水で洗うことによって、教会を清めて聖なるものとし、染みやしわやそのたぐいのものは何一つない、聖なる、傷のない、栄光に輝く教会を、ご自分の前に立たせるためでした。そのように夫も、自分の体のように、妻を愛さなくてはなりません。妻を愛する人は、自分自身を愛しているのです。これまで、誰もわが身を憎んだ者はいません。かえって、キリストが教会になされたように、わが身を養い、いたわるものです。私たちはキリストの体の一部なのです。」(エペソ5章25〜30節)

・父としての責任。「父親たち、子どもを怒らせず、主のしつけと諭しによって育てなさい。」(エペソ6章4節)

・主人としての責任。「主人たち、奴隷に対して同じようにしなさい。脅すことはやめなさい。あなたがたが知っているとおおり、彼らとあなたがたの主は天におられ、人を分け隔てなさらぬのです。」(エペソ6章9節)

・長老としての責任。「私は長老の一人として、また、キリストの受難の証人、やがて現れる栄光にあずかる者として、あなたがたのうちの長老たちに勧めます。あなたがたに委ねら

れている、神の羊の群れを牧しなさい。強制されてではなく、神に従って、自ら進んで世話をしなさい。恥ずべき利得のためではなく、本心から、そうしなさい。割り当てられた人々を支配しようとせず、むしろ、群れの模範になりなさい。そうすれば、大牧者が現れるとき、あなたがたは消えることのない栄冠を受けます。」（第一ペテロ5章1〜4節）

権威下にある者を独裁的に支配せよという指示は見当たりません。むしろ、夫、父、主人、長老には、前向きな態度と行動が求められています。自分の息子たちを責任ある男として育てることも、与えられている責任の一角です。

責任ある男になるにはどうすればよいのでしょうか。

- 責任あるクリスチャン男性の特徴を認識すること。
- 自分のよろしくない態度や行動を罪として告白すること。
- 聖書に記された神の命令に従う決心をすること。
- 見做うことのできる責任ある男性と関係を築くこと。
- 責任ある男性から直接、あるいは書籍、ブログ、講演、ポッドキャスト、動画などを通じて学ぶ決心をすること。

もしあなたがクリスチャンではないとすれば、クリスチャンを見つけて、クリスチャンになりたいということを伝えてください。この本の最後の章では「福音」を説明していますので、そちらの記事を読んでください。そして、聖書を手に取り、まずはルカの福音書、ヨハネの福音書、使徒の働き、ローマ人への手紙を読んでください。

もしあなたがクリスチャンであるなら、次のことをしてください。

- 罪や罪の行いを神に告白すること。具体的に告白しましょう。念を押します。罪を告白し、すべて捨て去りましょう。罪を拒絶し、神の前に悔い改めましょう。そして、キリストの血によって心を洗い清めていただきましょう（第一ヨハネ一章5〜10節）。
- 従順になりましょう。神の恵みによって、決心しましょう。あなたの責任範囲の中で起こったことに関しては、他人のせいにならないことを決心しましょう。
- 妻と子どもたちに霊的リーダーシップ、衣食住、愛、安心、安全、慰めを与えることを決心しましょう。それこそがあなたの最優先の仕事です。
- 罪を告白してから、生きた模範と正しい教えとによってあなたに責任のある生き方を教えてくれる男性と関わるようにしましょう。
- 毎日御言葉を読み、学び、学んだことを実践する意志をもって聖書を開きましょう。
- 神の助けを求めましょう。

第十三章 クリスチャンになるということ

(手紙による質疑応答)

「父なる神と主イエス・キリストから、平和と、信仰を伴う愛とが、きょうだいたちにありますように。」

(ローマ6章23節)

1997年ごろのこと、私たちは『どうすれば恨みから自由になれるのか』というエッセイを冊子として無料配布していました。この冊子を受け取ったある女性からハガキが届きました。彼女はとても悩んでいる様子だったので、何か助言ができればと思います、電話をしてみました。何日か経ったら、再び彼女から手紙が届きました。そこから何か月間か、手紙のやり取りをしました。この章は、その女性との対話の記録です。彼女の許可のもと、私たちの対話をトラクトにして配りました。結局何千枚という枚数を配りました。この対話をとおして、同じようなどころで悩んでいる方々に力添えができれば幸いです。

〃 9月1日 〃

ジムさんへ

救いを探し続けているということをお伝えしたくて、この手紙を書いています。他人を見る限りでは、他の人は救いを簡単に理解できているようですが、私はとても苦勞しています。でも頑張り続けています。

私は毎日聖書を読んでいますし、祈っています。ただ、誰に向かって祈っているのかは確信がありません。あなたが送ってくださいだった本のうちの一冊（中国の宣教師についての本）はもう読み終えていて、次はジムさんからいただいた、ストットの『信仰入門』を読み始めています。時間のやりくりが難しいですが。

ジムさんが送ってくださいだった本も、そして電話で話してくださいだった時間も、本当に感謝しています。私がキリスト教やその教えについてあまりにも無知であることを、申し訳なく思っています。

本を読んだり、人と話したりすればするほど、自分の最大の障害は「信頼」と「信仰」だということがわかってきました。誰かに頼むということがとても難しく、なかなかできません。でも、変わりたいと思っています。

ジムさんは「まずはキリストを見つけて、それから教会を見つけなさい」と言いましたが、私はとても驚きました。あの日から毎日、その言葉を思い出しては、祈ろうとしています。祈

るということはどうしてもぎこちなくて、どこか子どもじみた感じがして。でも祈り続けています。

本のお代をお送りしようと思ったのですが、できませんでした。贈り物を受け取るということが、私にはまだ難しいのです。いつかきつと、あなたがしてくださったように、誰かを助けることで恩返しができるばと願っています。

私はこれからも頑張り続けます。そしていつか、「イエス様を見つけました」という文面の手紙を送りたいです。本当にありがとうございます。

その日まで

ヴィッキー

～ 9月18日 ～

ヴィッキーさんへ

わかりやすいお手紙を書いて送ってくれてありがとう。手紙の中でヴィッキーさんはこう書いていました。

- ① 「頑張り続けています。」
- ② 「最大の障害は『信頼』と『信仰』」
- ③ 「ぎこちなくて、どこか子どもじみた感じがして」
- ④ 「贈り物を受け取るということが、私にはまだ難しい」
- ⑤ 「これからも頑張り続けます」

まず①と⑤に関して、頑張ることをやめましょう。「頼ること」と「頑張ること」は同時進行ではできません。「頑張ること」が今あなたの一番大きな問題です。「頑張る」というのは、自分にかかっていると思っているから。「頼る」というのは、他人にかかっているということ。もちろん頼りない人に頼って救われようとするのは愚かなことですが、でもあなたが信頼している方はそういう方ではありません。自分の信仰を手にとって見つめて、一々点検することはやめましょう。その代わりに、神の誠実さに目を向けましょう。

②に関して、クリスチャンになるためには「大きな信仰」も「強い信仰」も要りません。とても信頼できる神への小さな信仰で十分です。言い換えれば、神によって救われるのであって、信仰によって救われるものではありません。信仰と信頼は、神の言葉、キリストの言葉を聞くところから始まります（ローマー0章17節）。「頑張ること」や「自分の信仰を点検すること」は、いずれも妨げです。

③に関して、次の御言葉を読んでみてください。

「よく言うておく。心を入れ替えて子どもにならないければ、決して天の国に入ることはいできない。だから、この子どものように、自分を低くする者が、天の国でいちばん偉いのだ。」

（マタイ18章3〜4節）

「しかし、イエスは乳飲み子たちを呼び寄せて言われた。『子どもたちを私のところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。よく言うておく。子どものように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。』」

（ルカ18章16〜17節）

この場合、子どもらしさは良いことです。子どもは頼るのが上手ですから。

④に関して、贈り物でなければならぬのは、天国はあまりにも高すぎて、どんなお金を差し出しても手に入らないからです。でもあなたを愛しておられるお方が、贈り物としてあなたに与えてくださっているわけですから、ありがたく受け取りましょう！

「罪の支払う報酬は死です。しかし、神の賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠の命なのです。」

(ローマ6章23節)

「私たち自身もかつては、無分別で、不従順で、道に迷い、さまざまの欲望と快楽の奴隷になり、悪意と妬みのうちに日々を過ごし、人に嫌われ、互いに憎み合っていました。しかし、私たちの救い主である神の慈しみと、人間に対する愛とが現れたとき、神は、私たちがなした義の行いによってではなく、ご自分の憐れみによって、私たちを救ってくださいました。この憐れみにより、私たちは再生の洗いを受け、聖霊により新たにされて救われたのです。神は、この聖霊を、私たちの救い主イエス・キリストを通して、私たちに豊かに注いでくださいました。こうして私たちは、イエス・キリストの恵みによって義とされ、希望どおり永遠の命を受け継ぐ者とされたのです。」

(テトス3章3〜7節)

ヨハネ一章1〜4節、ヘブル一章1〜4節、コロサイ一章13〜20節も読んでみてください。この箇所をまとめると、二つの真理が教えられています。

1. 御父とともにいる神の子は、すべての人とすべてのものの造り主です。私たちはイエスによって造られたので、イエスのものです。

2. イエスは私たちを救ってくれました。つまり、十字架に架かって死んでくださった御業をとおして、私たちを買い戻してくださったのです。なおのこと、私たちは主のものなので、主によって造られ、主によって買い戻されたのですから。

これに加えてローマ5章6〜8節とローマ4章24〜25節を読んでください。福音書はもう読みましたか？ まだ読んでいなければ、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネもあわせて。

頑張ることはやめましょう。ただ読んだことに応答するだけで十分です。御言葉と戦う必要はありません。

主イエス・キリストにあって

ジム

9月29日

ジムさんへ

あなたの手紙を読んだら、とても安心しました。なんだか腑に落ちたような。私はこれまでたくさん頑張ってきました。それでどこにも進まないどころか、心が暗くなっていく一方でした。

私は何かの奇跡を待っていました。雷なのか、何なのか。なんでもいいので、私が救われているという証明を。でも何も起こりませんでした。でも聖書には確かに書いてありました。私にできることは、ただ信じて、願うこと。それ以上のことは私にはできません。だから私は聖書を読んで、祈って、求めました。あとは神様にお任せすることにしました。私が救われるかどうかが神の御手にあるのなら、そのように信じて、自分を神様に委ねます。これは私の人生の中で一番大きな信仰の一步です。

ジムさんの手紙と電話がとても嬉しいです。ジムさんにハガキを送ってよかったなと心から思います。ジムさんの生きる姿を見ると、ジムさんが持っているものがどうしても欲しいと思わされます。実際に会ったことがないのに、それでもジムさんが心を尽くして主を愛していることが分かるくらいです。ジムさんの言葉に神の愛が滲み出ているみたいで。だから続けて聖書を読み、神様に祈ります。ジムさんのためにもお祈りします。(まだなんだか子どもじみた感じがしますが！でもそれでもいいんですね！)火曜日から聖書の学び会に行くことになりました。ヨハネを勉強します。とても楽しみます！

ジムさんは本当に素晴らしい人です。心から感謝します。
愛をこめて

ヴィッキー

〃 10月9日 〃

ヴィツキーさんへ

お手紙をありがとう。ヴィツキーさんの手紙から引用させてください。「私は何かの奇跡を待っていました。雷なのか、何なのか。なんでもいいので、私が救われているという証明を。でも何も起こりませんでした。でも聖書には確かに書いてありました。私にできることは、ただ信じて、願うこと。それ以上のことは私にはできません。だから私は聖書を読んで、祈って、求めました。あとは神様にお任せすることになりました。私が救われるかどうかが神の御手にあるのなら、そのように信じて、自分を神様に委ねます。これは私の人生の中で一番大きな信仰の一步です。」

前の手紙でも言いましたが、まだヴィツキーさんは頑張りすぎているのかもしれない。ただそこが問題かもしれないね。質問をしたところですが、そうしたら返事のお手紙を待たなければいけませんので、思い込みかもしれないませんが、ヴィツキーさんはもしかしてこのような信仰を持っていますか。

- ・ 聖書を読むときには、熱意をもって読む。
- ・ 祈るときには、熱心に祈る。
- ・ 願うときには、情熱的に願い求める。

熱意と熱心があれば、雷か何かがおりてくると思っていますか。だから神様に明け渡しているときも、熱心に明け渡しています。大きな信仰の一步をとったときも、精一杯跳びませんでしたか。

でもあなたの聖書の読み方、祈り方、求め方、悔い改め方、跳び方、委ね方はそれでも人間中心だということが見えますか。救いは神の御手にあるのです。

「きょうだいたち、私はここでもう一度、あなたがたに福音を知らせます。私があなたがたに告げ知らせ、あなたがたが受け入れ、よりどころとし、これによって救われる福音を、どんな言葉で告げたかを知らせます。もっとも、あなたがたが無駄に信じたのではなく、今もしっかりと覚えていければの話ですが。最も大切なこととして私があなたがたに伝えたのは、私も受けたものです。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおりに私たちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおりに三日目に復活したこと、ケファに現れ、それから十二人に現れたことです。」

(第一コリントー5章1〜5節)

あなたは聖書を手に取っていますが、私からすれば、あなたは手に取っている聖書よりも、聖書を取っている手に力を入れてるように思います。でもあなたが握っているのは御言葉です。つまり、キリストに掴まっている。キリストが神であるということ。私たちの罪のために死んだということ。葬られて、復活したということ。

だから焦点を移しましょう。まず、神の聖さ。次に、神の聖さからはかけ離れた私たちの罪深さ。それから、私たちの罪深さよりはるかに大きな神の恵み（ローマ5章20節）。

どうか、あなたの信仰を信じないでください。

情熱的な祈りではなく、普通の言葉で、神に向かって二つの祈りを祈りましょう。「神様、罪人の私を憐れんでください。」（ルカ18章13節）。「イエスの御名によって私を救い、罪を赦してくださいあってありがとうございます。」

そうすればその結果が生活の中に現れてきます。例えばこのような実が実ります。クリスチャンを愛するようになる（第一ヨハネ3章14節、ヨハネ13章34〜35節）。聖書に従うようになる（第一ヨハネ2章3節）。理解が深まる（第一コリント2章14節）。霊の結ぶ実（ガラテヤ5章19〜23節）。神の言葉をそのまま信じる（ヨハネ5章24節）。訓練（ヘブル2章5〜7節）。

これは本当のクリスチャンにしか結ぶことのできない実です。もしあなたの生活の中に一つもないとすれば、あなたはまだ外側にいます。でもヴィッキーさんは、そうではないと思います。

主イエス・キリストにあつて

ジム

〜 10月12日 〜

ヴィッキーさんへ

今日の午後はマルコー0章を読んできました。ぜひともヴィッキーさんに読み比べてほしいなと思いました。17節から始まるのは「金持ちの男」の話、46節から始まるのは「盲人バルティマイ」の話。この二つのお話を読んでから、比べてみてください。

金持ちの男

盲人バルティマイ

1. 裕福 物乞い
2. 走っている 座っている
3. 体は健やか 盲人、上着を脱ぎ捨てた
4. 「何をすればよいでしょうか。」 「私を憐れんでください。」
5. 六つの戒め 「何をしてほしいのか」
6. 「守ってきました。」 「また見えるようになることです。」
7. 「あなたに欠けているものが…」 「あなたの信仰があなたを救った」
8. 悩みつつ立ち去った 目は癒され、イエスに従った

一人目はできると思っていました。でもできませんでした。それで顔を曇らせ、悩みながら立ち去っていきました。二人目はできないことを確信していたので、完全にイエスに信頼しました。

愛するヴィッキーさん。あなたはバルティマイさんのようになっています。それが私たちの歩むべき道なのです。

主イエス・キリストにあって

ジム

〃 10月19日 〃

ジムさんへ

前回のお手紙、本当にありがとうございました。とてもよく理解できました。信仰って簡単で、シンプルで、自由なものですね。

それでも手紙の内容には驚きました。まさに私がしていたことをすべて言い当てていたので。ジムさんの提案を受け入れて、手紙に書いてくださったように祈りました。神様が私の人生に来てくださり、御心のままに導いてくださるようにと、毎日祈ります。まだ自分で人生の主導権を握ってしまうことも多いですが、少しずつ神様に助けを求めようになっってきました。

でもまだ理解できないこともたくさんあります。「なぜ？」だらけです。神様が与えてくださるような愛を理解するのは、私にはとても難しいことです。そのことはかなり考えていましたが、考えても実りがなかったの、もう考えるのをやめようと決めました。誰かが本当に私のことを愛してくれるって、ずっと信じられずにいました。きっと子ども時代の問題につながると思います。でも子どもの頃の思いは、大人になった今でも私に付きまっています。神様は私を愛しています。そして、神様の助けによって、神様の愛を受け入れることを学んでいきたいです。

マルコの福音書にある金持ちの男と盲人の話を読みました。私は裕福というほどではありませんが、でも他の人と比べると、恵まれてきた方だとは思いますが。私は神様との関係を持ちた

いと願っています。これまで何度も困難な時がありましたが、その都度、私は根性で乗り越えてきました。でも最近になって気づいたことがあります。私が根性だと思っていたのは、実ははじめから神様だったのです。私はよくほめられてきました。たくさん苦勞してきたのに、根性がある人だつて。でも私は今になって気がつきました。ずっと一人で耐えていたわけではありません。神様が、ずっと私のことを守ってくださいましたのです。過去を振り返ると、それがとてもはつきりと見えてきます。私が経験してきた痛みは、本来なら私の人生を終わらせてもおかしくないものでした。でも、そうはなりませんでした。私は「生き続ける理由」があるはずだと、ずっと感じていました。一歩ずつ前に進み、明るい明日を信じて、他人の方がもっと厳しい状況を乗り越えてきたと自分に言い聞かせながら。だからどんなときでも笑顔を忘れずにいようと頑張ってきました。それができたのは、神様が私を守ってくださいましたからです。

これから毎日、私は神様に感謝します。御子イエス様が私のためにあれほどの痛みを耐え抜かれたほどに、私を愛してくださいましたことを。その光景を見なければならぬとしたら、どれほど辛いことだったか。想像もつきません。自分のせいでもそこに架けられているとは。私は毎日百回くらい神様を私の人生に招かなければなりません。すぐに自分の力で何とかしようとしてしまうからです。でも神様の助けがあれば、私は学習して、神様は私を変えてくださいます。

ジムさんのお手紙が本当に大好きです。いつかお会いできる日を楽しみにしています。手紙を書いて、電話をくださって、本当にありがとうございます。いつもジムさんから手紙が届く

と、気持ち晴れます。光が差し込んできて、はっきりと見えるようになります。

ときどき心がいっぱいになってしまふほど、すごいことだと感じます。こんなにもはっきりと見えるなんて、自分でも驚いています。他のことがほとんど考えられないほどです。

ジムさん、あなたは神様と共に歩んでおられる人です。私はあなたのために、そしてあなたの働きのためにお祈りします。あなたが、私にとってどれほど大きな助けとなってくださったか、ぜひ知ってもらいたいです。きっと、神様の助けによって、あなたは多くの人を助けてくれたのだと思います。もし神様がそう望まれるなら、私もいつか誰かを助けることができるようになりたいです。

いつも愛をこめて

ヴェイツキー

〃 10月24日 〃

ヴィッキーさん

19日付のお手紙が今日届きました。手短なお返事です。ヴィッキーさんのお手紙から引用します。「神様が私の人生に来てくださり、御心のままに導いてくださるようにと、毎日祈ります。」「私は毎日百回くらい神様を私の人生に招かなければなりません。すぐに自分の力で何とかしようとしてしまうからです。」

ヴィッキーさんは毎日神様をお願いしていて、それを一日に百回も願わなければならないと思っていますね。

でもそのような祈りは不必要です。百回どころか、神様を招く祈りは、一日に一度も祈る必要はありません。毎日何度もお願いしているのは、「神様が来てくださったとしてもすぐに離れてしまう」と思っているからです。でも、本当に神様があなたのところに来てくださったのなら、二度とお願いする必要はありません。なぜなら、神様は「私は決してあなたを見捨てず、決してあなたを置き去りにはしない」と約束したからです（ヘブル13章5節）。さらに約束しています。「私は彼らに永遠の命を与える。彼らは決して滅びず、また、彼らを私の手から奪う者はいない。私に彼らを与えてくださった父は、すべてのものより偉大であり、誰も彼らを手から奪うことはできない。私と父とは一つである。」（ヨハネ10章28〜30節）。それからローマ8章31〜39節も神様の尊い約束です。

だから神様に来てもらうようにお願いするのはやめましょう。その代わりに感謝しましょう。感謝なら、一日百回でも構いません。

ヴィッキーさんは「とてもよく理解できました。信仰って簡単で、シンプルで、自由なもの」とも言いましたね。

もうすぐクリスマスです。その日になれば、友だちも親戚もプレゼントを持ってきてくれるでしょう。プレゼントの代価はもう支払われていて、きれいに包装されていて、上にはあなたの名前が載っています。それなのに、皆のところに戻って、「申し訳ございませんが、プレゼントをくださいませんか」とお願いしますか。百回お願いしますか。いいえ、聞かなくとも、あなたのために備えられたものなので、あなたに与えられます。もちろんプレゼントを置いて、受け取らないままで、包装を取って中を覗いてみることもなく、その場を立ち去ることもできますが。プレゼントは拒むことはできませんが、お願いすることはありません。あなたの救いもそう。あなたのために買ったもの、あなたのために支払われたもの、あなたの名前付きのものなのだから、お願いする必要はありません。

「だから、誰でもキリストにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去り、まさに新しいものが生じたのです。これらはすべて神から出ています。神はキリストを通して私たちをご自分と和解させ、また、和解の務めを私たちに授けてくださいました。つまり、神はキリストにあつて世をご自分と和解させ、人々に罪の責任を問うことなく、和解の言葉を私たちに委ねられたのです。こういうわけで、神が私たちを通して勧めておられるので、

私たちはキリストに代わって使者の務めを果たしています。キリストに代わってお願いします。神の和解を受け入れなさい。神は、罪を知らない方を、私たちのために罪となさいました。私たちが、その方において神の義となるためです。」

(第二コリント5章17と21節)

私はキリストに代わってあなたにお願いしています。神の和解を受け入れてください。あなたにはお願いする必要はありません。キリストがお願いしています。あなたは受け取って感謝すればいいのです。

あなたがこれまでどのような人生をおくってきたのかはまだ聞いていません。(無理やり引き出そうとして言っているではありません。)すでに話してくれた限りでも、あなたがた皆さんの困難を生き抜いてきた人、諦めない人だということは分かります。だから神様を信頼することも大変だと思えます。神様はもしかして信頼できないお方かもしれないから、自分を信頼するほかにないと思ってしまう。

でも今は違いますね。神様が信頼できるお方だということはもう分かっています。

「なぜ？」という質問は忘れましょう。答えが与えられたとしても、その答えで十分かどうかを判断するのはあなたの仕事ではありません。部屋が暗いとしみましょう。まず「電気とは？」として電気が流れれば光が生まれるのか？」というところを調べ尽くしますか。いえ、暗ければ、スイッチを入れます。

あなたはこうして命を与えられて、生まれていますが、「脳、心臓、腎臓などの動きが分からないから」という理由で生まれることを拒むことはできませんでした。生理学の博士号を取ってから生まれるわけではありません。生まれるということも、新しく生まれる（＝救われる）ということも、受け身なのです。

「なぜ？」という質問は後になって答えが分かるかもしれませんが、でももしかするとその時にはもう、質問の答えはそれほど重要なものとは思わなくなっているかもしれません。

主イエス・キリストにあつて

ジム

びっくりしていますが、イエス様のことを知るようになってから、突然いろいろな人から連絡が来るようになりました。もう何年も関わっていないような人から、突然、連絡が入ったりして。みんなにイエス様のお話をするのが楽しみです！

あまり自分の人生について話していませんでした。私は三十五歳です。結婚していて、子どもは二人います。私も夫も離婚経験者です。夫は前の結婚で二人の子どもがいましたが、珍しい遺伝的な病気で、子どもは二人とも亡くなりました。下の子は二年前に、上の子は五年前に。家族全員にとってとても痛くて、苦しい経験でしたが、特に夫にとっては……。夫はまだ恨みを持っています。神は信じていないし、無神論だと言います。でも自分の娘たちに何年にもわたってそれだけ辛い思いをさせるような神様は憎いとも言います。そんな彼のために、私は毎日お祈りしています。

私の子どもは二人とも無宗教だと言います。一人は大学生、一人は中学生です。二人とも母に似て……。でもそれでも私を愛してくれて、親孝行してくれます。本当にいい子どもたちですが、まだ主を知りません。子どもたちのためにも、毎日お祈りしています。

私は虐待と依存症が混ざり合った家族背景です。母はアルコール依存症でした。今もそうです。物心がついたところに、私は家出をしました。十六歳のときに長男を出産しました。そこから私は薬物やアルコールを乱用するようになり、男付き合いも悪かったので、人生がどんどん悪くなっていきました。二十一歳のときに薬物はやめました。そのあたりでもう一度妊娠して、結婚しました。結婚した人は、子どもの父親ではありませんでした。それからカリフォルニアに引っ越しましたが、彼が浮気しました。その流れで二人でユタ州に戻ってきましたが、

すぐに離婚しました。その後、娘の父親ともう一度関係をはじめました。（息子の方の父親はもう亡くなっていました。）といっても、友だち関係だけでしたが。でも娘の人生に積極的に関わってくれるようになって、まるで家族の一員のようにになりました。彼も二年前に亡くなりました。継娘が亡くなった直後でした。

ここ数年の間に経験した病氣、苦しみ、闘い、死……。そんな中で、私がどれだけ恵まれてきたのかに気づいたので。私の身近な家族の中には、私ほど恵まれていない人が何人もいます。

私はビジネスで成功してきました。夫を愛していますし、子どもたちも大好きです。私が育った環境は、何もない環境でしたが、私の子どもたちには何でも与えることができました。私知っていることは、全部独学です。それで子どもたちを教えてきて、お金で買える喜びはすべて楽しんできました。——それでいて……。子どもどときと何一つ変わらず虚しさを感じていたのです。

でも今は人生で初めて、心から笑えるようになっていきます。心に喜びがあるからです。（今まで笑顔を浮かべることが、冗談を言うこともありましたが、ほとんど仮面でした。）私が神様のことを知らなかったときでさえ、神様が私を生かして、導いてくださったことには疑いの余地もありません。そして今、神様を知り、日々学び続けている中で、私は自分でも言い表せないほどの喜びを感じています。神様は、私の人生に働き始めておられます。何もしていないのに、私を愛してくださる人がいるなんて。なんだか、私の勘違いかもしれませんが、今までは全部「条件付き」だったように感じていきます。

私は実の父を知りませんでした。昔一度だけ会ったことはうっすら覚えていますが。でも知らないながらに、私は父を愛していました。六か月ほど前に、父の所在を調べました。四年前に亡くなっていました。もしもっと早く探していれば、会うことができたかもしれないと思うと悲しくなります。私の人生には父親のような存在はいまありません。これからもしません。もしジムさんにハガキを送っていなかったら、神様を求めるときもしなかったかもしれないかもしれません。でも今は神様を知りました。絶対失いたくはありません！私を助けてくれてありがとうございます。ごぞいます。

愛をこめて

キリストにある妹のヴィッキーより

〃 12月1日 〃

ジムさんへ

長い間手紙を書いていませんでした。お返事のお手紙が待ち遠しいです。あなたもご家族も元気で過ごしていますか。

私は最近、仕事でとても忙しくしていました。忙しすぎるくらいです。ここ二週間ほどは、とても落ち込んだ気持ちで過ごしていました。なぜなのかを考えていたのですが、やっと理由が分かりました。以前のように、毎日聖書を読んだり学んだりしていなかったのです。祈ることも、前ほど頻繁にしていませんでした。昨晚、聖書を読んで祈りました。すると気持ちがいになりました。でも、今日はまだ読んでおらず、また少しずつ落ち込みが戻ってきているのを感じます。だから、以前からずっと書こうと思っていたのですが、やっとこの手紙を書くことにして、そのあと落ち着いて聖書を読むつもりです。

年末は昔から私にとって落ち着かない時期でした。今年こそは違うようになることを願っていました。今までとは違う年末にするには、自分で変えていかなければいけないのだと気づかされました。私はイエス様に心を向け、人生の中心に据える必要があります。そうすれば、他のすべてのこともきつと良くなると思います。分かっているのにどうしてそれがなかなかできないのでしょうか。なぜこんなに難しく考えてしまうのでしょうか。

いつか、車でそちらに行つて、あなたに直接お会いしたいと思っています。その前にもしそちらに来ることがあれば、どうか教えてください。

最近気になったことがあって、一つ聞かせてください。昨晚、私たちはヨハネ一章を読んでいます。人は死ぬと、すぐに天国に行くのでしょうか。もしそうなら、「復活」とは何なのでしょうか。もしすぐに天国に行かないのなら、復活までの間、その人はどこにいますのでしょうか。復活は一回だけでなく、複数あるのでしょうか。イエスは死からよみがえられたとき、物理的な身体を持っておりましたが、私たちも物理的な身体を持つのでしょうか。ちょっと気になったので質問してみました。

素晴らしいクリスマスと、もっと素晴らしい新年をお過ごしください！
愛をこめて

ヴィッキー

〃 12月16日 〃

ウィッキーさんへ

お手紙と家族への贈り物が今朝届きました。ありがとうございます！

ウィッキーさんの手紙で教えてくれた気づきはその通りです。御言葉を読んで祈ることをとおして神と時間を過ごすことは、主の喜びにとどまるための一つ大きな手段です。それに加え、もう一つ大切なことがあります。これは主の喜びから離れないようにする「予防」というよりは、いざ主の喜びから離れてしまったときの「回復」の手段です。これは「罪の告白」と呼ばれるものです。この件に関して、この手紙に添えてカセットテープを一つ送りますので聞いてみてください。録音の内容と重なりますが、エッセイも同封しますので、そちらもどうぞ。その間に、第一ヨハネ一章5〜10節を読んでください。何度か繰り返し読んで読むのがおすすめです。その段落を読んだら、奇数節に出てくる「良い知らせ」と、偶数節に出てくる「悪い知らせ」に注目してみてください。そして、5節に基づいて、7節と9節を実践してください。特に6節、8節、10節は実践しないように。最後に第一ヨハネ全体を読んでみてください。特に注意していただきたいのは「知っている」という表現です。丸をつけてみてください。

それでは、「体のよみがえり」について。

私たちは死ぬとき、そのまますぐに天国に行きます。体はこの世に置いていきます。

「私にとって、生きることはキリストであり、死ぬことは益なのです。けれども、肉において生き続けることで、実りある働きができるのなら、どちらを選んだらよいか、私には分かりません。この二つのことの間で、板挟みの状態です。私の切なる願いは、世を去って、キリストと共にいることであり、実は、このほうがはるかに望ましい。しかし、肉にとどまるほうが、あなたがたのためにはもっと必要です。」

(ピリピ一章21〜24節)

第二コリント5章6〜9節も参照ください。

体のよみがえりはイエス・キリストが世にかえってこられるときに起こります。

「きようだいたち、眠りに就いた人たちについては、希望を持たないほかの人々のように嘆き悲しまないために、ぜひ次のことを知っておいてほしい。イエスが死んで復活されたと、私たちは信じています。それならば、神はまた同じように、イエスにあって眠りに就いた人たちを、イエスと共に導き出してください。主の言葉によって言います。主が来られる時まで生き残る私たちが、眠りに就いた人たちより先になることは、決してありません。すなわち、合図の号令と、大天使の声と、神のラツパが鳴り響くと、主ご自身が天から降って来られます。すると、キリストにあって死んだ人たちがまず復活し、続いて生き残っている私たちが、彼らと共に雲に包まれて引き上げられ、空中で主に出会います。こうして、私たちはいつまでも主と共にいることになります。ですから、これらの言葉をもって互いに慰め合いなさい。」

(第一テサロニケ4章13〜18節)

この出来事については第一コリント15章47〜54節にも書かれています。

イエスがこの世にかえってくるときに、私たちも一緒に世に戻ります。そうしたらイエスと同じで、私たちの体もよみがえります。

「しかし、私たちの国籍は天にあります。そこから、救い主である主イエス・キリストが来られるのを、私たちは待ち望んでいます。キリストは、万物を支配下に置くことさえできる力によって、私たちの卑しい体を、ご自身の栄光の体と同じ形に変えてくださるのです。」

(ピリピ3章20〜21節)

他にも第一ヨハネ3章1〜3節、テトス2章1〜4節、ローマ8章22〜25節を読んでみてください。

私たちの主イエス・キリストにあって

ジム

第十四章 福音

「ロでイエスは主であると告白し、心で神がイエスを死者の中から復活させられたと信じるなら、あなたは救われるからです。」

(ローマ10章9節)

この本を読んだ読者のうちには、読みながら自分がまだ救いにあずかっていないということに気づかされた人もいるかもしれません。もしあなたがクリスチャンであるなら、恨みという恐ろしい罪から解放されることができません。もしクリスチャンでないのなら、あなたの苦い気持ちは他の多くの罪と結びついており、さらに、罪に傾いていく性質とも深く関係しています。苦い思いと恨みとを取り除くためには、新しい心が必要です。そして、古い心を取り除いてもらう必要があります。これはあなたにはできません。神にしかできないことです。あなたにできることはこれです。

- ① 罪と罪に対する裁きから離れたいということを中心から願わなければなりません。
- ② 心から願ったところで、罪からは離れられないということを弁えなければなりません。
- ③ 善い人になろうとしても、あるいは悪いことを避けたりしても、あなたのどんな努力によっても、あなたは自由にならないということを知らなければなりません。

④ 神はすでに救いの道を用意してくださったことを知らなければなりません。神は独り子なる主イエスをこの世におくり、神の敵のために死なせることによって、救いは完了しました。「キリストは、私たちがまだ弱かった頃、定められた時に、不敬虔な者のために死んでくださいました。」（ローマ5章6節）。

⑤ 主イエスは私たちの罪のために死なれた三日後に、私たちが義と認められるために、死より復活しました。「イエスは、私たちの過ちのために死に渡され、私たちが義とされるために復活させられたからです。」（ローマ4章25節）。

⑥ いま聖霊があなたの心を動かして、あなたが罪から離れ、主イエスの聖名を呼び求めるように導いています。だからイエスの死と復活を頼りにして、主の和解を受け入れ、主に立ち返ってください。「口でイエスは主であると告白し、心で神がイエスを死者の中から復活させられたと信じるなら、あなたは救われるからです。実に、人は心で信じて義とされ、口で告白して救われるのです。」（ローマ10章9〜10節）。「きょうだいたち、私はここでもう一度、あなたがたに福音を知らせます。私があなたがたに告げ知らせ、あなたがたが受け入れ、よりどころとし、これによって救われる福音を、どんな言葉で告げたかを知らせます。もつとも、あなたがたが無駄に信じたのではなく、今もしっかりと覚えていればの話ですが。最も大切なこととして私があなたがたに伝えたのは、私も受けたものです。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおり私たちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおり三日目に復活し

たこと、ケファに現れ、それから十二人に現れたことです。」（第一コリントー5章ー5節）。

主イエスを呼び求めたなら、あなたは救われましたから、天のお父様と和解したことについて、「ありがとう」と祈って感謝しましょう。また罪をすべて赦してくださいだったこと、永遠の命を与えてくださったことについても「ありがとう」と伝えましょう。

あなたは赦されましたから、肩が軽くなったでしょう。その喜びを誰かに伝えてください。私たちにお手紙を送ってくださいれば、これから信仰生活の土台づくりに役立つ本をお送りします。ので、ご連絡ください。

